

昭和61年度発掘調査概報 I

茨木市教育委員会

はしがき

本市は、京都・大阪・神戸を結ぶ交通の要路であり、琵琶湖から大阪湾へと流れる淀川の北岸に位置しています。北の山地部から市域を南北に縦断する安威川は、古代から人々の生活には欠くことのできない最も重要な水資源であり、この水の獲得は村々の繁栄にも大きく影響するため、協議または闘争が繰り返され、これらの歴史を記した古文書も残されております。

おそらく、原始・古代においても人々は、水資源を求めて生活していただろうと思われます。

本市にはこうした時代の遺跡が東奈良遺跡や郡遺跡をはじめ、いまだ数多く地下に眠っております。これらの貴重な文化遺産を保存・保護していくことは、今に生きる我々に課せられた責務であります。近年の急激な開発にともない文化財は破壊の危機にさらされ、保存・保護は年々難しくなってきてるのが現状です。

ここに概報としてまとめました埋蔵文化財調査報告書は、昭和61年度に実施した発掘調査のうち、東奈良遺跡5ヶ所、中条小学校遺跡1ヶ所の計6件の調査を合冊して報告したものです。

最後になりましたが、調査に従事された方々や、ご協力をいただきました関係各位に感謝の意を表しますとともに、今後共、文化財の保存・保護についてなおいっそうのご指導とご援助、ご協力をお願い申し上げる次第です。

茨木市教育委員会

教育長 中平 敏

例　　言

1. 本概報Ⅰは、東奈良遺跡及び中条小学校遺跡における昭和61年4月から同年9月までの発掘調査結果の概要をとりまとめたものである。

2. 発掘調査にあたっては、東奈良遺跡86-5を茨木市教育委員会社会教育課主査奥井哲秀、東奈良遺跡86-1~4、中条小学校遺跡86-2を茨木市教育委員会事務局文化財調査員（嘱託員）井上直樹が担当して実施した。

整理作業は、昭和61年4月~同62年3月まで実施した。発掘調査と整理作業には、藤原弘喜、井上誠、中東正之、沢田安宏、松場正洋、上枝朱美、大戸井和江、桑原紀子、田中良子、早川博子、森木芳子、峯松皓代、国分佐知子、松井喜志子諸氏の協力を受けた。

3. 発掘調査を実施するにあたっては、有限会社山本、平尾徳秀、寺阪耕次、ニシキ産業株式会社、浅川宏志、サントリー株式会社の各位に御協力いただいたことに感謝します。

4. 本概報Ⅰの執筆は、本文を各担当者が、遺物実測は東奈良遺跡86-1を土岐、井上(直)、同86-2~4を井上(直)、同86-5を奥井、国分、中条小学校遺跡86-2を井上(直)、遺物写真を井上(直)が行った。

5. 東奈良遺跡の地区割りは、昭和47年設定のものを使用している。

(東奈良遺跡調査概報Ⅰ・Ⅱ 昭和54・56年参照)

本概報Ⅰ記載発掘調査地一覧表

東奈良遺跡

No.	調査地	申請者	土木工事の目的	発掘調査面積
86-1	茨木市沢良宜西	有限会社山本	共同住宅新築	80m ²
86-2	茨木市沢良宜西	平尾徳秀	共同住宅新築	216m ²
86-3	茨木市沢良宜西	寺阪耕次	共同住宅新築	50m ²
86-4	茨木市沢良宜西	ニシキ産業株式会社	共同住宅新築	170m ²
86-5	茨木市東奈良	浅川宏志	共同住宅新築	400m ²

中条小学校遺跡

No.	調査地	申請者	土木工事の目的	発掘調査面積
86-2	茨木市下中条町	サントリー株式会社	社宅建替	252m ²

本文 目 次

はしがき

例 言

1. 東奈良遺跡 86-1 H・N、K-4-G・H地区

1 調査経過	1
2 層 位	1
3 造 構	1
4 遺 物	2
5 結 語	4

2. 東奈良遺跡 86-2 H・N、H-4-B地区

1 調査経過	5
2 層 位	5
3 造 構	5
4 遺 物	6
5 結 語	9

3. 東奈良遺跡 86-3 H・N、J-2-D地区

1 調査経過	10
2 層 位	10
3 造 構	10
4 遺 物	11
5 結 語	11

4. 東奈良遺跡 86-4 H・N、I-2-D地区

1 調査経過	12
2 層 位	12
3 結 語	12

5. 東奈良遺跡 86-5 H・N、F-5-E・I地区

1 調査経過	13
2 層 位	13
3 造 構	14
4 遺 物	17
5 結 語	18

6. 中条小学校遺跡 86-2

1 調査経過	19
2 層 位	19
3 造 構	19
4 遺 物	21
5 結 語	22

図版目次

- 図版1 (上) 東奈良遺跡86-1 H・N、K-4-H地区 全景(西から)
(下) 東奈良遺跡86-1 H・N、K-4-H地区 井戸-1
- 図版2 (上) 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 全景(北から)
(下) 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 桶
- 図版3 (上) 東奈良遺跡86-3 H・N、J-2-D地区 全景(北から)
(下) 東奈良遺跡86-4 H・N、I-2-D地区 調査風景(南西から)
- 図版4 (上) 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 南第Ⅰ造構面(南から)
(下) 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 南第Ⅱ造構面(南から)
- 図版5 (上) 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 北第Ⅱ造構面(北から)
(下) 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 土器-II
- 図版6 (上) 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 木棺-I
(下) 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 木棺-II
- 図版7 中条小学校遺跡86-2 全景(西から)
- 図版8 (上) 中条小学校遺跡86-2 土壙-2
(下) 中条小学校遺跡86-2 井戸-2
- 図版9 東奈良遺跡86-1 H・N、K-4-G・H地区 出土の土器
- 図版10 東奈良遺跡86-1 H・N、K-4-G・H地区 出土の瓦・石器
- 図版11 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 出土の土器
- 図版12 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 出土の土器
- 図版13 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 出土の土器・石器
東奈良遺跡86-3 H・N、J-2-D地区 出土の七器
- 図版14 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 出土の土器
- 図版15 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 出土の土器
- 図版16 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 出土の土器・石器
- 図版17 中条小学校遺跡 86-2 出土の土器
- 図版18 中条小学校遺跡 86-2 出土の土器・石器
- 図版19 東奈良遺跡・中条小学校遺跡 全体図
- 図版20 東奈良遺跡86-1 H・N、K-4-H地区 全体図・土層図
- 図版21 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 全体図・土層図
- 図版22 東奈良遺跡86-3 H・N、J-2-D地区 全体図・土層図
- 図版23 東奈良遺跡86-4 H・N、I-2-D地区 全体図・土層図
- 図版24 中条小学校遺跡86-2 全体図・上層図
- 図版25 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 全体図・土層図
- 図版26 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 木棺-I

- 図版27 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 木棺-II
- 図版28 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 土器-I・II
- 図版29 東奈良遺跡86-1 H・N、K-4-G・H地区 出土の土器・瓦
- 図版30 東奈良遺跡86-1 H・N、K-4-G・II地区 出土の石器
- 図版31 東奈良遺跡86-2 H・N、II-4-B地区 出土の土器
- 図版32 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 出土の土器
- 図版33 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区 出土の土器・石器
- 東奈良遺跡86-3 H・N、J-2-D地区 出土の土器
- 図版34 東奈良遺跡86-5 H・N、F-5-E・I地区 出土の土器
- 図版35 中条小学校遺跡86-2 出土の土器・石器

挿 図 目 次

第1図	H・N、K-4-H地区 井戸-1・平面・土層図	2
第2図	H・N、H-4-B地区 構	9
第3図	H・N、F-5-E・I地区 溝-II出土の土馬	14
第4図	H・N、F-5-E・I地区 砧石	15
第5図	中条小学校遺跡 溝-1 土層図（北面）	19
第6図	中条小学校遺跡 井戸-2 上層図（北面）	21
第7図	中条小学校遺跡 土壇-2 土器出土状況図	22

1. 東奈良遺跡86—1 H・N、K—4—G・H地区

1. 調査経過

所在地 茨木市沢良宜西二丁目114番地

調査面積 80m²

調査期間 昭和61年3月12日～同年3月31日

届出理由 共同住宅

H・N、K—4—G・H地区および茨木市沢良宜西の旧沢良宜西村一帯は、東奈良遺跡の中においても古代から中・近世にかけての遺跡の多い所である。これまでの発掘調査によって奈良時代末から平安・鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡、井戸などが多数発見されている。遺物としては、重圓文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、瓦器檜、土師皿などが出土している。沢良宜西一帯は、佐和良義（木）といった名で古代から中・近世の歴史資料に登場しており、式内社の佐和良義神社、平安時代の仏像3体が安置されている蓮花寺といった古社、古寺が付近にあることからしても、山大正川の自然堤防上に発達した古代からの集落があったと考えられる。

2. 層位

当地区の基本層位は、上層から耕土（畑）、細片化した弥生時代末から中・近世の遺物を含む整地層と考えられる床土の暗灰色粘土層。以下、無遺物の灰色粘質土層・灰色砂質土層、厚さ0.1～0.2mの古墳時代前期から中世の遺物を含む茶褐色砂質層が堆積している。古代末から中世にかけての生活面は、黄白色粘質土層または淡灰白色砂質層である。以下青灰色砂質層、白色砂質層が堆積しており、これはこの付近一帯の堆積層でもある。なお、生活面の標高はO.P.約5.1mであった。

3. 遺構

今回の調査では、掘立柱建物柱穴跡約60穴、土壙4基、井戸1基、溝3条が検出された。いずれも出土遺物から、平安時代から鎌倉時代頃のものと考えられる。

掘立柱建物柱穴跡 柱穴跡は、埋土からみて包含層（茶褐色砂質層）の上面から掘られたものと、最終生活面から掘られたものがある。掘り方は隅丸方形、柱根は円形をなすものが多くみられた。掘り方は1辺0.2～0.4m、深さ0.2～0.35m。柱根は径0.1～0.3m、深さ0.2～0.6mを測る。建物跡の復元は、調査面積の関係からできなかった。

土壙 土壙-1は、土壙の中心が現代の擾乱を受けて破壊されているが、長軸2.8m以上、短軸1.5m、深さ0.4mの楕円形すりばち状の土壙である。埋土は、土師器・須恵器・瓦器・瓦片を含む黑色砂質層である。土壙-2は、径約2m、深さ0.3mの浅い変形円形す

りばち状土壌である。埋土は、僅かに土師器・須恵器片を含む茶褐色砂質粘土層である。土壌-4は、長軸2.7m以上、短軸2.6m、深さ0.45mの楕円形りばち状土壌である。埋土は掘り方に沿って灰色砂層と暗灰色砂層、中央に暗黒色、暗灰色砂質粘土層が堆積する。埋土より、土師皿(図版-9・29 6~10)、瓦器碗(図版-9・29 11~12)、羽釜(図版-9・29 15)、練釉陶器片(図版-9 101~103)、獸骨片等が出土した。

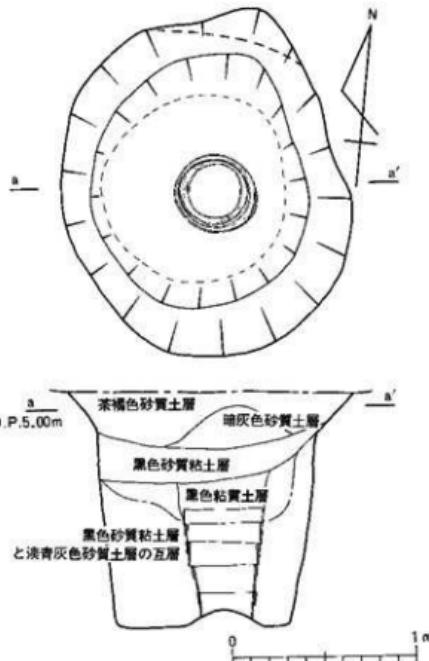
井戸 井戸-1は、溝-2・3埋没後に掘られており、検出時の径1.7m、深さ1.3mを測る。井戸内には、径0.3~0.4m、高さ0.15mの曲物を5段積み上げて井戸枠として使用している。井戸の製造方法は、堆積土等から考えて、地山の青灰色砂質層下層、木脈の白色砂層まで掘り下げた後、曲物を井戸上口より下へ約0.5mまで積み上げて井戸枠とし、井戸枠と井戸掘り方の空間を土で埋めたと考えられる。井戸枠内の埋土より、土師器・須恵器・瓦器片が出土したが時期を決定できるものはなかった。(挿図-第1図)

溝 溝-1は、調査地区の東端を南北に連なる幅約0.6~1.0m、深さ0.2~0.3mの小規模な溝である。埋土は、上師器片・須恵器片を僅かに含む茶褐色、黄褐色砂質層である。

溝-1は、柱穴に切られていることから他の遺構よりやや古いと考えられる。溝-2は、幅0.4m、深さ0.1mを測り、埋土は茶褐色砂質層である。時期を決定できる遺物は全く出土しなかったが、井戸-1、上塙-2に切られていることから、それらより古い溝である。

4. 遺 物

当調査区からの出土遺物は、弥生時代後期から近世の陶磁器までコンテナバット9箱程出土したが、その多くは細片であり、時期決定できるものは少なかった。当地区の西約20



挿図-1 井戸-1 平面・土層図

m (H・N、K-4-G地区、昭和53年度調査地区) より、古式須恵器・軒平瓦、碗等が出土しているので参考資料として記述する。

古墳時代の土器

須恵器

壺身(図版-9・29 5)は、口径12.1cm、器高5.1cm。たちあがりは内傾し、端部は僅かに外方に肥厚し丸い。受部は、ほぼ水平にのび端部は丸い。底部は高く、平坦である。

壺蓋(図版-9・29 4)は、口径12.8cm、器高5.3cm。口縁部は垂直に下がり、端部で内傾し段を成す。稜は断面三角形で丸い。天井部はやや高く、やや平坦である。いずれも包含層出土で、6 C前半頃のものである。

器台(図版-9・29 1~3)は、H・N、K-4-G地区の包含層出土である。器台は、壺部端部、壺部底部、脚部と脚底部のみが残存していた。脚部は外傾し脚底部で外反する。脚部には、断面三角形の凸帯によって6段以上に区分し、各段には櫛原体22本、15本の波状文が1条、最上段のみ2条施されている。脚端部は、断面三角形で丸く終る。脚部の各段には、長方形の透しが9方向、最上段のみ丸形の透しが5方向からあけられている。壺部は、端部が短く外反し、断面四角形で稜はにぶい。断面三角形の凸帯で3段以上に区分し、波状文が施されている。色調は青灰色、断面セピア色である。時期は5 C中葉頃のものである。

歴史時代の土器

土師質皿(図版-9・29 6~10)は、口径15cm前後、高さ3cm前後の9・10、口径11cm前後、器高1.5cm前後の6・7・8がある。いずれも口縁部の内外面のみ横ナデを施し、端部をつまみ上げている。いずれも土壙-4出土である。

瓦器(図版-9・29 11・12)は、12が口径14.7cm、口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は横ナデ、端部内面に浅い沈線を施す。内外面ともに非常に細い横方向のヘラ磨きがみられる。11は、口径10.3cm、器高3.9cm、口縁部は内弯ぎみに立ち上り、底部は大きく、断面半円形の退化した高台がつく。口縁端部内面に浅い沈線を施す。外面は、外周を4回に分けて横方向に細いヘラ磨き、内面は底部に放射状に施した後、横方向にいずれも細かく密なヘラ磨きが施されている。外面底部にも、細かい横方向のヘラ磨きが施されている。いずれも土壙-4出土である。

土師質甕(図版-9・29 16)は、復元口径17.5cm、口縁部と肩部に横ナデを施している以外は無調整で、指圧痕が体部外面にみられ、粗雑なつくりである。土壙-4の出土である。

土師質羽釜(図版-9・29 13~15)は、13が口径26.5cm、鉢径30.6cm。体部、口縁部は外方へのびる。15は口径20.5cm、鉢径25.8cm、口縁部は「く」の字形に外反する。鉢は下方へ外反する。14は、口径19.0cm、鉢径27.5cm、体部は内傾し、鉢は上方へ僅かに内反する。15は土壙-4、13・14は包含層出土である。

上塙—4出土の土師皿、瓦器、羽釜などは、平安時代末から鎌倉時代前期頃と考えられる。

瓦

軒平瓦（図版—10・29 17・18）は、いずれもH・N、K—4—G地区の柱穴の礎板代わりに使われていたもので、他に平瓦・丸瓦も出土している。17は、粗雑なつくりのものである。曲線額をもち、瓦当部が瓦の大きさに比べて厚い。側面と凹面端部にへラ削りがみられる。瓦当外縁は素文で、内区は両脇よりのびる異った唐草文である。凹面には布目痕、凸面には格子叩き文様がみられる。18も、瓦当の文様は17と同じであるが、さらに范の押しが悪く指頭痕によって文様がくずれている。焼成は、いずれも軟質で、色調は17が黒灰色、18が淡灰色、内部は淡灰色である。平安時代末頃のものと考えられる。

石器

太形蛤刃石斧（図版—10・30 19）は、かなり風化、破損が著しく詳細は判別困難である。このように破損が著しく、刃部が片刃になっていることから叩き石として二次使用されたと考えられる。断面は梢円形で、現存長12.6cm、最大幅6.7cm、厚さ4.1cm、重量580gである。石材は安山岩で、包含層出土である。

石錘（図版—10・30 20）もかなり風化が著しい。卵形をなし、切込みはないが、僅かに長軸に沿って対面どりがなされている。断面は円形に近く、現存長8.5cm、最大幅4.5cm、重量172.5gである。石材は砂岩で、包含層出土である。

硯（図版—10・30 21）は、H・N、K—4—G地区の柱穴より出土したもので、礎板代わりに使用されていたものである。硯は、石製で一部破損しているが、正方形に近い形態をしている。表面は、擦面（陸部）の中央を高くして両側面側を低く彫り、墨池は狭いが深く彫られている。裏面は、内割りが表面の擦面向って斜めに深く彫られている。擦面の彫りは、刃物の跡が残り、近世の硯に比較して雑なつくりである。また、擦面には墨の跡が残っている。現存長11.5cm、最大幅10.7cm、厚さ2cm、重量374g、石材は頁岩である。

5. 結語

当調査地区一帯は、旧沢良宜西村の東端に当る。当地区と、昭和53年度調査のH・N、K—4—G地区との合せて約300m²の調査によって、古代末から中世前期の掘立柱建物の柱穴跡が約200穴、井戸4基（内、曲物の井戸枠をもつものが2基）検出されたことから、当時の集落がこの付近まで広がっていたと考えられる。また、H・N、K—4—G地区から出土した瓦・硯、当地区よりの綠釉陶器片などから、この付近に平安時代後期から鎌倉時代の寺が存在していたことを物語っている。現在沢良宜西の北に建つ蓮花寺に平安時代前期と考えられる地蔵菩薩立像、同後期の十一面觀音菩薩立像、大日如来座像が安置されている点、この付近に薬師堂、垣内、中之坊の小字名が残っていることなどから、蓮花寺あるいはその前身の寺院の御堂がこの付近にあったと考えられる。

2. 東奈良遺跡86-2 H・N、H-4-B地区

1. 調査経過

所在地 茨木市沢良宜西一丁目26番6号

調査面積 216m²

調査期間 昭和61年5月30日～同年7月4日

届出理由 共同住宅

H・N、H-4-B地区一帯は、東奈良遺跡の中においても、弥生時代中期から古墳時代前期の遺構が多い所である。当地区より北約50mでは弥生時代中期の住居跡、東北100mでは弥生時代前期から中期の方形周溝墓群が、さらに西約110mでは古墳時代前期の大溝等が検出されている。

2. 層位

当調査地区の基本層位は、上層から耕土(0.1~0.2m)、床土の黄白色砂質層(0.2~0.3m)、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含む茶褐色砂質層(0.1~0.15m)、以下生活面の黄白色粘質土層あるいは灰色粘質土層、弥生時代中期の生活面である青緑色粘質土層と続き、さらに地山の青灰色粘土層となる。なお、生活面の標高は古墳時代前期がO.P.約6.4m、弥生時代中期がO.P.約6mであった。(図版-21)

3. 遺構

当調査地区で検出された遺構は、弥生時代中期から古墳時代前期の溝が重複して5条検出された。以下、時期が新しいと思われる溝から記述していく。

溝

溝-1は、層位的には包含層の茶褐色砂質層の面から堀られている溝である。溝は東西方向に連なり、溝幅(層位より推定)約4.5m、深さ0.6~1.0mを測り、東へ低くなっている。溝の南北の肩は、後述する溝-2・5と重複するため砂層あるいは砂質粘土層で、判別困難な所があった。溝の埋土は、上層に白色・灰白色の砂層、下層に灰色・黄色粗砂層と灰色粘土層の互層かいずれもレンズ状にみられ、下層から古墳時代前期の土器が多数検出された。

溝-2は、層位的にはさきの包含層堆積前の生活面である黄白色粘質土層、灰色粘質土層から堀られている。溝は北西から南東へ連なり、調査地区的南東では、さきの溝-1の南肩の外側まで溝肩が広がる。溝の規模は、幅約6.3m、深さ1.2~1.3mを測り、北西より南東へ僅かに低くなっている。溝の北東肩は急傾斜で切られているが、南西肩は緩やかな傾斜で切られており、一部二段の肩をつくっている。このことから、溝-2はこの付近

で北から東へ大きく蛇行しているとも考えられる。溝の埋土は、上層には灰色粘質土層が全面に堆積し、中層から下層にかけては北肩側が淡灰色砂質層あるいは砂質粘土層（多量の植物遺体を含む）、南肩側が黄色・灰色粗砂層であり、溝底は青灰色砂質層である。遺物は、南肩の溝底より一段高い所に堆積した黄色・灰色粗砂層から集中的に出土し、その多くは古墳時代前期のものである。

溝一3は、溝一2の北東で溝の一部のみが検出された。溝一3は二時期にわたって存在し、当初北から東へ屈曲して連なっていたが、埋没後、再び溝一2と直交する形で幅約1.2m、深さ約0.3mの断面V字形の溝を掘っている。この溝内には内部を割りぬいた自然木（径0.25m、長1.45m）が、四方に杭を打ち固定した状態で検出された。また、溝自体も埋め固めたような状態であったので、これは槌を利用して水を通す暗渠のようなものと考えられる。この自然木は、溝一2側が高いことから、溝一2から水を引いたと考えられる。しかし、調査地区の関係と壁面崩壊のため、これより北東へのつながりは不明である。しかし、杭が他にも検出されていることから、さらに延びていたと考えられる。なお溝一3の埋土（黒色粘土層）から弥生時代中期の土器が検出された。（挿図一第2図）

溝一4は、調査地区南西部で僅かに肩の一部を検出したのみである。層位的には、床土下層から堀られているが、詳細は明確でない。

溝一5は、南北に連なると思われるが北半部は、溝一1・2によって切られている。溝幅約6.5m、深さ約0.46mの深い溝である。溝底は、南より北へ低くなっているが、調査範囲が少ないので定かでない。埋土は、上層に暗灰色砂質層、中層に青灰色砂質層、下層に黄色粗砂層がみられた。上層の暗灰色砂質層から、弥生時代中期の土器が検出された。

4. 遺 物

弥生式土器

弥生式土器は、包含層、溝一3・5また溝一1・2からも僅かに出土した。

壺形土器（図版一11・31 22~24）。23は、体部より底部のみが残存している。球形に近い体部をもち、刷毛目の後横方向のヘラ磨き、縦部は縦方向のヘラ磨きがおこなわれ、底部は器高に比較して厚く、中央が凹みヘラ削りがおこなわれている。内面は中位で横、下位で縦方向の刷毛目調整がおこなわれている。文様は、最大腹径まで櫛描波状文、同直線文が施されている。溝一5出土の畿内第II様式である。24は、口縁部から頸部のみ残存している。頸部は外反し、さらに曲折して直立する口縁部をもつ。口縁部下位に2条の幅の狭い凹線文、頸部下端に幅広い貼り付け凸縁をめぐらし、原体による圧痕文が施されている。頸部外面は縦方向の刷毛目、内面は斜・横方向の刷毛目、口縁部は横ナブ調整がされている。溝一5出土の畿内第III（新）様式である。22は、口縁部から頸部のみが残存している。頸部は漏斗状に開く。口縁部は上下に僅かに肥厚する。頸部外面は縦方向の刷毛目、口縁部内面に横方向の刷毛目調整がおこなわれている。溝一3出土の畿内第III（新）様式

である。

壺形土器(図版一31 25~27)。25は、復元口径14.1cmの小型の壺である。口縁部径は腹径をしのぎ、頸部から水平に曲折し、口縁端部で上方に肥厚する。口縁部・頸部内外面は横ナデ、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は斜方向の刷毛目調整がおこなわれている。溝一5出土の畿内第II様式である。27は、復元口径13.4cmの小型の壺である。口縁部は頸部から大きく外反し、端部で僅かに上下に肥厚する。口縁・頸部は横ナデがおこなわれ、特に頸部は刷毛目の後、強いナデがおこなわれ、僅かにくびれしている。体部外面は縦方向の刷毛目、内面はヘラナデがおこなわれている。溝一5出土の畿内第III(新)様式である。26は、最大腹径がやや高い位置にある口径7.8cm、最大腹径9.2cmの小型の壺である。口縁部は短く「く」の字形に外反し、端部で僅かに上方方向へ肥厚する。体部外面は最大径まで縦方向の刷毛目、下位は上方へ向ってのヘラナデ、内面は指頭圧痕が残る。溝一3出土の畿内第III(新)様式である。

高环形土器(図版一11・31 28~30)。28・29は、水平に広がった口縁部内面に1条の凸帯をもち、外端は下に折れ曲る。28は、折れ曲った端部に4条の凹線文。28、29いずれも坏部外面は細かい縦方向のヘラ磨き、脚部の接合方法は円板充填法である。29は溝一5、28は包含層出土で、いずれも畿内第III(新)様式である。30は脚部のみで、据までなだらかに広がり端部で上下に大きく肥厚する。外面は10条の凹線文が施され、中位は円形の透しが不均等に3孔以上あけられており、縦方向の刷毛目が残る。内面は上・下位がヘラ削り、中位は絞り目がみられる。溝一3出土の畿内第IV様式である。

土師器 各土器の編年は、東奈良遺跡調査概報I(昭和54年)の土師器編年案を使用した。

壺形土器(図版一11・12・31・32 31~38 48)。34は、球形の体部に外上方に広がる口縁部をもつ。口縁端部は横ナデがおこなわれ丸く終る。体部外面は斜方向の荒いヘラ磨き、底部はヘラ削りがなされ、底部は尖りぎみで凹みがある。体部には縮み包みの日焼け跡が残る。口径13.3cm、最大腹径24.5cm、器高29.7cmを測る。溝一2出土の東奈良IVである。その他、同口縁をもつ壺として32・33がある。31は頸部から外反しながら、口縁部でさらに外反する。口縁端部は横ナデをおこない狭い面をもつ。頸部外面上段は横方向、下段は縦方向の刷毛目。同内面横方向の刷毛目とヘラ引きの2本の線刻がある。溝一2出土の東奈良IIIである。38は、筒状の頸部から大きく外反し二重口縁となる。口縁外面には、櫛波状文と4個一組の円形浮文が不均等に3ヶ所から4ヶ所貼り付けてある。口縁端部にはヘラによる刻目文が施されている。溝一2出土の東奈良IIIである。その他、無文の二重口縁をもつ35・36・37がある。37は、短い頸部から大きく屈曲し、上段は直線的にのび後が明確になり、他より新しく東奈良IVである。35・36は溝一1、37は包含層出土である。48は、口径8.5cm、最大腹径9.8cm、高さ8.15cmの小型の壺、口縁部は「く」の字形に外反し、端部で僅かに内湾する。体部は丸く、内面には指頭圧痕が残る。底部は平底でヘラ削りがな

されている。溝一1出土で東奈良IIIである。

夔形土器 (図版-12・32 39~46)。40は、胴長の体部に「く」の字形に外反する口縁部をもち、口縁端部は上方に肥厚し、端面に凹線状の凹みがある。体部は右上りの叩き目その後、荒くヘラナテがなされている。溝一1出土の東奈良Iである。39は、球形の体部に「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部で上方へ肥厚する。体部は右上り、水平、右上りの叩き目がおこなわれ、その後縦方向のヘラナテが荒くなされている。底部は突出平底である。口径18.1cm、最大腹径29.0cm、器高31.2cm。溝一2出土の東奈良Iである。41は、胴長の体部、口縁は「く」の字形に外反し、口縁中位で肥厚する。42は、最大腹径が高い位置にあり、「く」の字形に外反する口縁部。端部でより外反する。口径が最大腹径より大きい、小型の壺である。溝一1出土の東奈良IIである。43・44・45・46はいずれも球形の体部に「く」の字形に外反する口縁をもつ器壁の薄い壺である。底部まで残存する45・46は、いずれも丸底である。口縁部は中位で肥厚し、端部でつまみ上げた43・44と内外に肥厚する45・46がある。体部外面は細い刷毛目が横方向、底部は縦方向におこなわれ、内面はヘラ削りがなされている。45・46はいずれも溝一2、43は溝一1出土で東奈良IVである。

高环形土器 (図版-13・33 51・54~56)。51は、環部のみで、環部下半は内湾し、稜をもって立ちあがり外反し、端部で上方へ引き上げ面をもつ。端部外面と環部外面下段に竹管円形浮文、端部内面と外面中・下段に柳描波状文が施されている。包含層出土の東奈良IIにあたる。55・56は柱部が中空で、裾部は大きく外反し、端部は丸く終る。56は円形の透しが3ヶ所にあく。いずれも内部はヘラ削りがおこなわれている。54は、短い柱部に大きく広がる裾部、裾端部は丸く終る。外面は細かい縦方向のヘラ磨きがなされ、柱部内面に絞り目が残る。54・56は溝一1、55は溝一2出土である。いずれも東奈良IV頃である。

鉢形土器 (図版-13・33 47・49・50)。47は底部より外上方に立ちあがり、頸部で僅かにくびれ、さらに外上方へのびる。底部は平底で凹んでいる。体部には叩き目、口縁部はナテによって叩き目が消されている。口縁部内面は横方向に刷毛目、内部底面にヘラ押さえの跡があり溝一2出土の東奈良IIである。50は、脚台をもつ鉢で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、脚台は低く、周囲に指おさえをおこない、中央部が凹んでいる。溝一2出土の東奈良IVである。49は、丸底の底部から扁平ぎみの体部をもち、頸部でくびれ、内湾ぎみに口縁部がのびる。体部には横方向の細かいヘラ磨き、口縁部内面には暗文風の細かいヘラ磨きが施されている。口径10.6cm、最大腹径11.3cm、器高9.4cm、溝一2出土の東奈良IV~Vである。

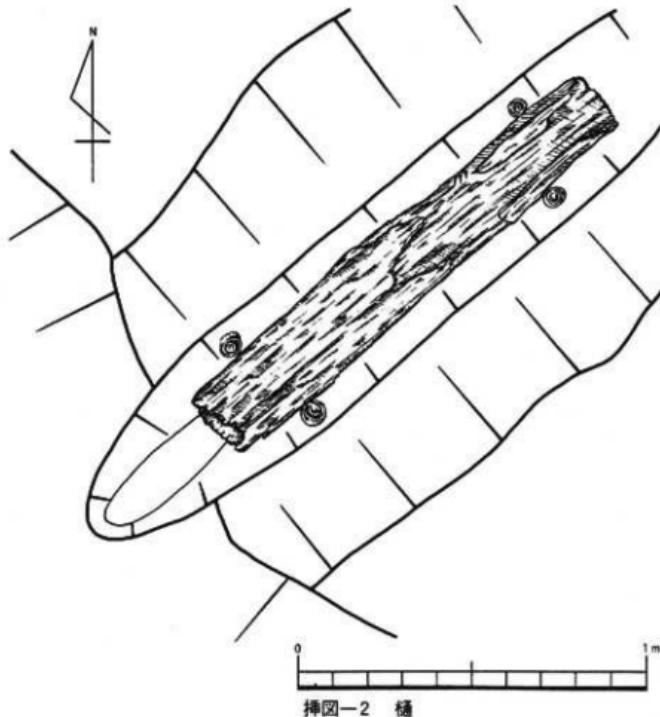
器台形土器 (図版-13・33 52・53)。52は、皿状の受部から内湾ぎみに裾部が広がる。受部端は丸く終る。53は裾部のみのため高环の可能性もある。短い充実の柱部から裾部は内湾ぎみに大きく広がる。いずれも裾部は縦方向のヘラ磨きを施す。溝一2出土で東奈良IVである。

石器

石器（図版一-13・33 57～59）。石鎌は、57が凸基有茎式、58が平基無茎式でいずれも断面菱形で57は2.7g、58は1.4gの大型である。57は溝一1、58は包含層出土である。石斧59は、扁平両刃石斧で、両側面の厚みが異り、重量28gを測る。包含層出土である。

5. 結 論

当調査区は、弥生時代中期から古墳時代前期の溝が複雑に交差する所であった。溝一2は、北東約50mの昭和50年度調査のG-3・4地区で同規模、同方向の溝が検出されている。溝一1・3・4・5に相当するものは現在のところ検出されていない。また、溝一2の北肩で検出された削りぬきの自然木は、そのあり方から水の給・排水のための樋（暗渠）と考えるのが最も妥当であると思われるが、類例がないため不明確である。溝の形成順序を出土遺物・層位から推定するなら、弥生時代中期（鐵内第III～IV様式）頃、溝一5・3が造られ、弥生時代後期にはいずれも埋まり、その後古墳時代前期頃、溝一2が造られたが、早い時期に埋まり、その後溝一1・4が造られたと考えられる。



3. 東奈良遺跡86-3 H・N、J-2-D地区

1. 調査経過

所在地 茨木市沢良宜西一丁目350-1番

調査面積 50m²

調査期間 昭和61年9月24日～同年9月30日

届出理由 共同住宅

旧沢良宜西村の北端にあたる当調査地区は、比較的調査の進んでいる東奈良遺跡のなかでも、調査例の少ない所で未知の部分が多いため、2回にわたって試掘調査を行った。いずれも古代から中世の包含層を確認したため、発掘調査を実施することになった。大正の頃までは、沢良宜西村の中央を南北に旧大正川が流れしており、当地区も自然堤防上に位置することになる。北約50mの地点では、古墳時代前期の溝状造構が検出されているが、現在までの旧沢良宜西村内の調査では、古代末～中世の造構が多い所である。

2. 層位

耕上は造成土とともに擾乱を受けて存在しなかった。以下、青灰色粘土層と淡灰色砂質層との互層(床土か)、淡灰色粘質土層、灰色砂質粘土層、淡青灰色砂質層、淡灰色粘質土層が堆積し、その間に白色砂層、淡赤黄色砂層が加わり、より複雑な状態がみられた。さらに、古墳時代後期から中世・近世の遺物を含む灰色粘質土層(0.2～0.4cm)、古代末から中世の生活面である黄灰色粘土層がみられた。なお、生活面の平均標高O.P.約6.1mである。

3. 造構

当調査地[区]より検出された造構は、溝3条、土壙1基、柱穴跡2のみであった。

溝

溝-1は、調査地区の南端で検出された東西に連なる溝である。溝は、北肩よりゆるやかに掘り込まれ、溝中央南よりで、さらに深く掘り込まれ、南肩へ立ち上る。溝幅2.3m、深さ0.25mと0.64mを測る。埋土は、暗灰色粘土層と北肩に沿って黒色粘土層がみられた。出土遺物は、暗灰色粘土層から平安時代末から鎌倉時代前期の須恵器・土師器・瓦器片が僅かに検出されたのみである。

溝-2は、調査地区の北側を東西に連なる溝で、東端で溝の南肩は南側へ大きく広がる状態がみられた。溝幅約3m、深さ約0.38mの溝底の広い断面U字形溝である。埋土は、暗灰色粘土層がみられ、時期不明の須恵器・土師器片が検出された。

溝-3は、南北に連なり、さきの溝-1・2をつなぐように検出されたが、層位的に

は各々の溝によって切られている。溝幅0.4~0.6m、深さ0.17mのU字形溝で、溝底部は北から南へ僅かに低くなっている。埋土は、暗灰色粘土層がみられ、土師皿、瓦器碗（図版-13・33 60~63）の他、須恵器・土師器・瓦器片が検出された。出土遺物から、鎌倉時代前期の溝と考えられる。

土壤

土壤-1は、隅丸長方形の上層と思われるが、調査地区外へのびるため明らかでない。長辺1.2m以上、短辺1.1m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰色粘土層であったが、遺物は全く検出されていない。

柱穴跡

柱穴跡は、溝-2の北肩と溝内より検出された。いずれも掘り方は円形で、径0.3m、深さ0.39mを測る。層位的には溝-2埋没後に掘られたものであるが、時期を決定するような遺物は検出されていない。

4. 遺 物

古墳時代の土器

环身（図版-13・33 60）は、たち上がりが内傾し低く、端部は丸く終る。受部は外上方へのび、内外ともナデ調整である。体部は、口径に比較して低く扁平である。底部は平坦でヘラ削り調整である。包含層（灰色粘質土層）出土の6世紀後半頃のものである。

鎌倉時代の土器

土師皿（図版-13・33 61）は、口径10.4cm、器高1.3cmで、口縁部の折り返しがなく横ナデ調整が2段なされている。

瓦器碗（図版-13・33 62・63）63は、復元口径14.7cm、器高4.8cmを測り、底部より内寄ぎみに外方に立ち上がり、端部でナデ調整をおこなって丸く終る。断面四角形の高台がつく。62は、底部より内寄ぎみに立ち上がり、端部で横ナデ調整がおこなわれ、内面に1条の沈線をもつ。内外面とも細かい暗文が施され、内底面には格子状の暗文が施されている。高台は剥離しており、復元口径16.5cm、残存器高5.3cmを測る。いずれも溝-3出土である。

5. 結 論

今回の調査では、調査範囲が限られていたため、3条の溝の性格などは把握できない。しかし、出土遺物の時期が前述のH・N、K-4-G・H地区と同時期であることから、印沢良宜西村一帯には、古代末から中世にかけての集落が存在していたことを文献のみでなく、考古学的にも裏づけができたと思われ、今後の調査が期待される。

4. 東奈良遺跡86-4 H・N、I-2-D地区

1. 調査経過

所在地 茨木市沢良宣西一丁目 8-1、9-1

調査面積 170m²

調査期間 昭和61年10月6日～同年10月22日

届出理由 共同住宅

H・N、I-2-D地区一帯は、昭和48、50年度調査によって、古墳時代前期の住居跡、大溝、井戸等が多数検出されている。しかし、この付近一帯は低湿地（平均標高O.P. 6m前後）の上、旧大正川の流れの移動も関係して、約50m離れると全く遺構、遺物が検出されない所がある。現在までの発掘調査によって、古墳時代前期の大溝（東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ・昭和54年）の西側では弥生時代を含め、原始・古代の遺跡が同東側に比較して少ないことが判明している。当調査地区は、西に自然堤防の高台上に蓮花寺があり、その後背のかなりの低地であった所である。その地形を示すように、東約50mのI-3-B・C地区では、近世の池の跡が検出されたのみであった。

試掘調査では、上師器片が検出されたが、発掘調査の結果、2回以上の生活面になる上層はみられたものの、遺構・遺物等は全くみられず、最終的には機械掘削によって、標高O.P. 3mまで掘り下げる土層調査を実施して発掘調査を終了した。

2. 層位

層位調査は、調査地区の東壁面とそれに沿って行った「スジ掘り」調査の壁面を利用して実施した。層位は、約2mの造成土が盛られており、旧耕土（表土）は削平を受けて存在しなかった。以下上層から、灰色砂質層、灰色粘質土層がみられ、調査地区北側ではこの層から堀り込まれた幅10m以上、深さ2m以上の砂層の堆積がある。さらに土師器・須恵器・瓦器・陶器片を僅かに含む灰色砂質・同粘土層、淡青灰色粘質土層（中世以降の生活面か）淡灰色砂質土層、暗茶褐色粘土層（無遺物層）、黄灰色粘土層（中世以前の生活面か）がみられた。この面から堀られた非常に大型の溝（自然水路）が調査地区的南半部で検出された。この溝の底は、標高O.P. 2m以下まで続いており幅10m以上、深さ3m以上、北北西から南南東へ連なっていたと思われる。この大型の溝からは、調査範囲内では全く遺物は検出されなかった。（図版-23）

3. 結語

当地区では、自然水路（旧大正川あるいはその支流）らしきものが検出された以外、全く遺構は検出されなかった。層位調査の結果考えられることは、自然水路埋没後も絶えず洪水を受けたり、湿润地の旧大正川の自然堤防の後背湿地の状態であったと思われる。

5. 東奈良遺跡86—5 H・N、F—5—E・I 地区

1. 調査経過

所在地 茨木市東奈良三丁目

調査面積 約400m²

調査期間 昭和61年8月1日～同年9月20日

届出理由 共同住宅

当調査区は、阪急南茨木駅と中央環状線が立体交差するすぐ東側の地点であり、東奈良遺跡における弥生時代前期の環濠集落の中心から南西方向約100mのところにあたる。

これまでの調査結果からこの辺りの地形を復元し、それに当調査区の位置をあてはめてみると、東奈良遺跡は弥生時代中期から古墳時代にかけての生活域のほぼ中央に谷がみられるが、その谷状に落ち込んでいくところの東側の肩部に位置する。また、この周辺は、すぐ東側で弥生時代の方形周溝墓や溝・貯藏穴等が検出され、谷の反対の西側に、弥生時代中期の方形周溝墓（東奈良遺跡調査概報Ⅰ・昭和54年）等が検出されている。

当調査区は、幅約5.5m、長さ70mと南北に細長い調査域であり、土捨場の関係から、調査は北と南の2回に分け、まず南区域の調査から開始した。

2. 層位

現G・Lから約-1.4mにて、第Ⅰ造構面である黄褐色砂質土層の生活面が存在するが、この層は一定せず、調査区の北側部分においては、黄色の砂層へと変化する。このことは、調査区の当時の地形が北から南へと若干傾斜しており、層の堆積方向が北（上部）から南（下部）へと流れている結果であろう。この第Ⅰ造構面の上層は、いずれの層も一定しており、上面から耕上・床上・黄褐色粘土層と堆積し、その下に灰褐色の粘土層（包含層）が厚さ約10cmで堆積している。この層中から、6C後半頃の須恵器片等が出上しているが、出上量はごくわずかである。この第Ⅰ造構面には、溝—I・II・III・IVの4条の溝と若干のピットが検出されている。溝はいずれも東西方向へと流れている。

第Ⅰ造構面から下層は、基本的には白濁色砂層・青灰色粘土層・茶濁色砂層・青灰色粘土層と各層間に若干の異層をはさみながらも、砂・粘土・砂・粘土上の堆積を示している。また、溝—Iは第Ⅰ造構面からの掘削であるが、第Ⅱ造構面をも堀り下げており、下層にまでほぼ同じ位置、方向を保っている。下層の黒色粘土層中から、弥生中期（III～IV）の上器が出上していることから、弥生期の溝が幾度かの堆積にも凹地として残り、修復を重ねながら後世にまで引き続いていると考えられる。第Ⅱ造構面の生活面は青灰色粘土層となっており、東奈良遺跡の基本的な地山として他の場所と同じである。この深さは、現G・Lより約2mである。

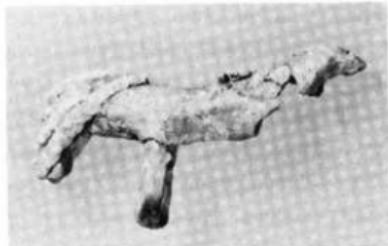
第Ⅰ造構面のO.P.は約6.3m、第Ⅱ造構面のO.P.は約5.2mで北から南へと低くなっている。

3. 造 構

当調査区から検出された造構は、第Ⅰ造構面においては溝4条と若干の柱穴のみであり、第Ⅱ造構面においては溝5条、土壙4基（内1基は貯蔵穴）木棺墓2基、柱穴4、不明の落ち込み等であり、他の東奈良の調査地域と比較すると、造構密度の薄いところである。

(1) 第Ⅰ造構面の造構

溝一Ⅰ 調査地区の最も南側で検出された東西に連なる溝である。溝幅2.3m、深さ1.06mを測る。溝内の堆積は大きく分けて2時期にまたがり、上層部は白濁色砂層であり、この層中に弥生式土器から上師器までのものを包含している。土師器のうちほぼ完形の小形丸底壺が出土している。(図版一4 109)



挿図一3 溝一Ⅱ 出土の土馬

この溝は下層の第Ⅱ造構面をも掘り込んでおり、溝内の下層堆積土（黒色粘質土層）中からは弥生時代中期の遺物が出土していることから、かなり長い間溝としての機能をはたしていたとも考えられる。

溝一Ⅱ 東西に連なる細く浅い溝である。溝幅0.8m、深さ0.12mを測る。溝内の堆積土は黒灰色粘質砂層であり、溝内より時期不詳の土馬が出土している。(挿図一第3図)

おそらく第Ⅰ造構面より上層から掘り込まれていたと思われるが、後世の削平によって溝底のみが残った結果であると考えられる。

溝一Ⅲ 東西に連なる浅く幅広い溝である。溝幅4.4m、深さ0.22mを測る。溝内の堆積土は黄白色の砂層であり、遺物の出土は全くなかった。

溝一Ⅳ 東西に連なる溝である。溝幅4.4m、深さ0.4mを測る。溝内の堆積土は溝一Ⅰの上層と同様の白濁色砂層である。出土遺物は時期不詳の土師器1点のみであるが、その堆積層から、溝一Ⅰと同時期でおそらく古墳時代前半頃のものと考えられる。

その他の造構

柱穴3穴、溝一Ⅱと溝一Ⅳにはさまれた地域に3穴の柱穴が検出された。いずれも出土遺物はなかった。また、柱穴間の連続性もみられないものである。いずれも径0.4mの円形を呈している。

(2) 第II遺構面の遺構

溝—I' 第I遺構面の下層部分にあたる溝で、方向は溝—Iと同様ながら位置がやや東よりにずれている。幅2.3m、深さ約0.8mを測る。溝内の堆積土は黒色粘土層であり、弥生時代中期の遺物が出土している。

溝—V 東西に連なる溝である。幅2.6m、深さ0.42mを測る。溝内の堆積土は黒灰色粘土層であり、弥生時代中期の遺物が出土している。

溝—VI 東西に連なる溝である。幅1.3m、深さ0.7mを測る。溝内の堆積土は黒灰色粘土層であり、多数の弥生時代中期の遺物が出土している。また溝底の中央部に、大きさ約縦15cm、横20cm、高さ15cm程度の不定形の砂岩系の石が出土している。この石の表面は部分的にきれい

に磨かれているところがあることから、砥石（挿図—第4図）として使用されたものと思われる。この石は、地山に置いて他の石を研磨するのに使用されたものが、溝—VI内にころがり込んだものであろう。

溝—VII 調査区の最も北側に位置し、東西に連なる溝である。溝内の北側が調査区域外であったため、幅全体の規模は不明であるが、検出幅は3.1m、深さ0.86mのしっかりとした溝である。溝内の堆積層は4つの層に分けられる。上から黒色粘質土層、黒色粘質土層（砂混り）、黒色粘土層、黒色粘質土層（砂礫混り）の互層である。出土遺物は完形のものも含めて多量であり、また石包丁、石鎌等の石器も出土している。（図版—16、120～124）

溝—VIII 東西に連なる溝である。幅1.7m、深さ0.4mを測る。溝—VIとはほぼ同規模であり、方向性も同じであることとその間隔（約5m）から、方形周溝墓の可能性も考えられるが、南北方向の溝が調査区域外のためその確認はできなかった。

土壙—I 主軸を南北方向にとる。長軸2.5m、深さ0.25mで、短軸は東半分が調査区域外のため不明である。内部堆積土は黒色粘質土層であり、遺物の出土はない。南端は径0.6m、深さ0.08mのピットによってきられている。

土壙—II 主軸をほぼN-45°-E方向にとる。長軸2.4m、短軸1.0m、深さ0.31mである。内部堆積土は、黒色粘質土層である。弥生時代中期（畿内第III～第IV様式）の遺物片が出土している。

土壙—III 径0.7m、深さ0.45mのほぼ円形の土壙である。内部堆積土は黒色粘質土層であり、底部に弥生時代中期（畿内第III～第IV様式）の甕1個体が口縁をやや北西方向に、斜め上方に向けて埋められていたことから、貯蔵穴と考えられる。

土壙—IV 主軸をほぼ南北方向にとる。長軸1.7m、深さ0.26mで、短軸は東西半分が調査区域外のため不明である。内部堆積土は黒色粘質土層であり、弥生時代中期（畿内第III



挿図—4 砥石

～第IV様式)の土器片が出土している。

木棺—I 主軸をN—80°—Wにとる。両木口と底板・両側板の一部が残存する。ただし側板はほぼ土と同化し、その痕跡を残す程度である。各部の現存長は、底板最大長1.62m、最大幅0.4mを測る。構造は、底板の上内側に木口板・側板をのせたものであり、木口のところには溝を彫っていると考えられる。さらに、木口は側板の内部におさまる構造である。

壠方は、北西部において棺の約1/2のところまで円形の荒掘りがあり、その中に木棺が入るだけのスペースで壠方がある。故にその壠方の規模は、木棺よりひと回り大きいものである。このことから、木棺の復元規模が推定できる。壠方規模最大長1.9m、最大幅0.48m、深さ0.24mを測る。出土遺物は、壠方内より弥生時代中期の上器片が出土している。

(図版—6・26)

木棺—I Ⅱ 主軸をN—30°—Eにとる。底板・木口・両側板が残存し、内部に入骨が検出されている。木棺の規模、底板の長さ1.7m、幅0.5mを測る。深さは、木口の残存最大高点から底板まで0.2mである。構造は、木棺—I Ⅱ と同様底板の上に両側板・木口がのり、さらに木口は両側板より内にある。底部には、木口をのせる溝が彫り込まれている。蓋は残存しない。

棺の内部には、入骨が残っており、北側に肋骨や腕の骨、南側に大脛骨がある。その大脛骨の上部に頭蓋骨及び歯が検出されている。おそらく頭位は北北東に向けていたのが、腐食が進むにつれ足元の方に転がっていったものと思われる。副葬品はなかった。

壠方は、最大幅1.2m、最大長2.12m、深さ0.21mを測る。その構築の順序は、①大きな壠方を掘る。②その内部に底板の長さと幅が入るだけの壠方を掘る。③底板を入れる。④両側板及び木口をたてる。⑤壠方端から木口・両側板までの間に、先に掘りあげられた土を埋め戻す。この時底板の端々はすでに土に埋もれる。⑥壠葬主体を入れる。⑦蓋をする。⑧土を入れ、棺を覆う。この順序である。

底板を取り上げると、頭部があった周辺はその下より炭化木を一部敷きつめたように層をなす。おそらく棺自身を何らかの意味で長期保存を意識したのではないだろうか。棺及び入骨には炭化の跡は見られない。

壠方内の互層より弥生時代中期(畿内第III～IV様式初)の壺形の上器片が出土している。木棺蓋の時期はこの時期のものと考えられる。(図版—6・27)

柱穴 木棺—I Ⅱ から北へ約5mの若干平地になった地山上に、4つの円形の柱穴が存在する。各ピット間の関係は、径・深さ・位置関係等から連続性のないものである。各規模は次のとおりである。

ピット—I	径0.3m、深さ0.26m	ピット—I Ⅱ	径0.24m、深さ0.25m
ピット—I Ⅲ	径0.31m、深さ0.27m	ピット—I Ⅳ	径0.23m、深さ0.22m

その他の遺構

調査区の南端の北から南へと若干傾斜した地域に、2基の土器が個体(破片状)で検出

されている。いずれも完形とならないことから、後世の削平时に削りとられたものか意図的に欠落させられたものは定かでない。

土器一I 弥生時代中期(畿内第III—第IV様式)の壺で全体の $\frac{1}{2}$ が残存する。現存器高32.5cm、口径30.1cmを測り、胴張りのやや丸い形をしている。底部は欠損のため不明。胎土は0.1—0.3mmの砂粒を含んだ乳白色を呈し、口縁部に幅2mmの細い凹線が3条めぐっている。外面ハケ調整を施し1ヶ所に黒斑がある。(図版—5—28)

土器一II 弥生時代中期(畿内第III—第IV様式)の壺で、口頸部欠損の他は胴部から底部にかけて残存する。現存器高39.2cm、最大腹径39.5cmを測る。胎土は乳白色を呈し、頸部に巾5mmの凹線が2条残存しているが、上部欠損のため何条あるかは不明。頸部直下から胴中央部にかけて、櫛描直線文・波状文の順で4条ずつの文様が施され、波状文で終る。調整法は、底部から上部 $\frac{1}{3}$ まで縱ヘラみがき、胴中央は横ヘラみがき調整されている。体部上半に、縦約6cm、横約2.5cmの不定形の焼成後穿孔されている。この壺は下部のピット状造構と関連するものであり、おそらく棺として利用したものであろう。土器と相接して、一本の石棒状の石製品が出土している。(図版—28)

4. 遺 物

弥生式土器

壺形土器(図版—34—64・65・71)。64は口縁部から頸部のみ残存。口縁部径19.8cm、残存高9.4cm。胎土は茶褐色を呈し、角閃石・長石・石英・黒雲母等を多く含む。中でも長石は0.5—0.6cmのも含めて多い。河内系の土器と考えられる。

口縁端部下部へ肥厚し、ややくぼみながら面をもつ。この面に櫛描波状文を施す。口縁部上面にも櫛描波状文1条を施している。外面横ナテ後、縦ハケ調整、頸部内部は横ハケ調整をしている。

65は口縁部から頸部の約 $\frac{1}{4}$ が残存。口縁部径17cm、残存高7.7cm。胎土は乳白色を呈し、石英・長石を若干含む。焼成良好である。口縁部上・下部とも肥厚し面をもつ。この面に櫛描波状文を施している。頸部外面に2条の凹線を施し、その下部に欠損のためわかりにくいか円形の刺突文を施している。

内部上面には二段の簾状文が施されており、口縁端部の波状文と同じ原体を使用している。外面縦ハケ整形の後、上半部横ナテ調整している。

71は口縁部から頸部と肩部の一部分が残存。口縁部径9.6cm、残存高14.5cm。胎土は乳白色を呈し、砂粒は少ない。焼成良好である。文様なし。外面やや荒い縦ハケ整形で、口唇部近くは横ハケ整形。内面粘土紐のあとが頗著に残る。復元形は、胴部丸味をもって突出した小さな平底をもつものと思われる。

壺形土器(図版—15・34—74・77・78) 77はほぼ完形品である。口縁部径14.7cm、器高22.4cm。胎土は乳白色を呈するが、スス付着のためやや黒っぽい。細かい砂粒を含む。口

唇部上部肥厚し、下部は部分的に若干肥厚するところもある。外面最大腹径やや上面に、爪による刻み目文が約1cmの間隔で1周する。外面縦ハケ整形の後、一部横ナデ調整をしている。口縁部内面横ハケ整形、体部内面の上部は縦ハケ整形、胴下部には指圧痕が多くみられる。

78は、全体のりんが欠損しているが、口縁部から底部までの破片が出土しているので復元可能である。口縁部径13.9cm、器高16.8cm。胎土色調はスヌ付着のため不明。砂粒含む。口縁部やや丸味を帯び「く」の字形に外反する。頸部は棒状のもので長さ約1cmの刻み目を施し、1cm弱の間隔で1周する。外面体部は丁寧な縦ハケ整形、口縁部内外面とも横ナデ調整、体部内面や左斜め方向にハケ調整している。

74は、口縁部から体部の一部のみの小破片である。口縁部径16.6cm、残存高4.4cm。胎土は乳白色を呈し、0.1~0.3cmの砂粒を含む。焼成良好。口唇部下部がやや肥厚し、頸部はややゆるい「く」の字形に外反する。外面口縁端部から肩部にかけて左下斜め方向のタタキ目を全面に施す。内面は横ナデ調整している。

高环形土器

高环（図版-34 80）は、脚部との継ぎ目のところで欠損した環部のみのものであり、円板充填部分も丸く欠損している。胎土は乳白色を呈し、焼成良好である。口縁部径約30.8cm、残存高5.6cm。口縁径に対し器高（環部）の低い高环である。脚部から大きくやや上方に開き、一度屈曲して斜め上方に短く外反する。外面で丁寧なヘラ磨き。口縁端内外面とも横ナデ調整。内面横方向のヘラ磨きのち、やや荒く縦ヘラ磨き。

5. 結 論

当調査区は、前述の如く第I・第II造構面の2回の生活面があり、さらに、第I造構面の上部にもうひとつ造構面が、溝-Iの存在によって考えられるが、この造構面は後世に削平され失くなってしまったものと考えられる。第I造構面は古墳時代初頭の頃と考えられるが、第II造構面は弥生時代中期（畿内第II様式）からの造物が出土している。各溝はいずれも東西方向へと連なるが、溝-I'、溝-VI、溝-VIIは出土遺物が多く、特に溝-VIIからは土器溜めの如く出土量があった。他の造構が少ないと考えられるものは、おそらくこの地域が住居域から少し離れていたと考えられるものである。

6. 中条小学校遺跡 86—2

1. 調査経過

所在地 茨木市下中条町12番18号

調査面積 252m²

調査期間 昭和61年8月5日～同年9月13日

届出理由 杜宅建替

中条小学校遺跡は、昭和34年に中条小学校（今回の調査地区の南西約200m）で発見された遺跡である。当時確認された遺構・遺物は、刺り抜き式の戸戸枠をもつ戸門、溝、柱穴跡、弥生時代後期の土器等が出土している。その後も、周辺から多くの弥生時代中期～古墳時代の遺物、遺構が検出されている。特に昭和51年度の校舎改築工事に伴う発掘調査では、弥生時代中期の堅穴住居跡、溝、戸戸門が発見された。また、その範囲も北へ延び、東奈良遺跡から分村後かなり長期集落が存在していたと考えられるようになった。しかし、残念なことに、近代この付近に瓦工場があったための粘土取りと遺構面が浅いため農作業などによって、削平、擾乱を受けている所も多くある。今回の調査地区でも、北側に建つ杜宅工事の時にかなりの擾乱を受けていた。

2. 層位

当調査地区には約0.5～0.7mの造成土が盛られており、以下耕土、灰色砂質層、黄灰色粘質土層（東半は青灰色砂質層）、黄灰色粘質土層（東半は黄灰色砂質粘土層）となり、調査地区中央部で自然地形の落ち込みがみられ、西から東へ低くなっている。なお遺構面は標高O.P.約9.0～9.5mである。

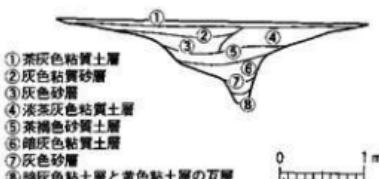
3. 遺構

当調査地区では、溝8条、土壙11基、戸戸門2基、柱穴跡多数が検出された。以下その主だった遺構を記述する。

溝

溝一は、調査地区内の北から南西へ蛇行するように連なっている。

溝は、西肩は上口よりなだらかに3段の段をもって掘られ、東肩は上口



挿図-5 溝-1 土層図(北面)

よりなだらかな傾斜で掘られているが中位より急激に落ち込む。上口の大きく開く断面V

字形溝である。溝幅約4m、深さ約0.93mを測る。溝内の埋土は、粘質土層、砂層がレンズ状に堆積しており、上層の灰色砂層、淡茶灰色粘質土層から細片化した古墳時代前期頃の遺物が多量に出土した。(挿図一第5図)

溝一2は、調査地区東端を南北に連なる小規模な溝である。溝幅約0.5m、深さ約0.2mを測り、溝底が北より南へ低くなる断面U字形溝である。埋土は、茶灰色砂質層、同粘質土層、淡灰白色砂層がみられた。埋土中から、古墳時代前期頃の土師器片が出土した。

溝一3は、調査地区中央部を北から南東へ連なり、南側で溝幅が広くなる。溝幅1.7~4m、深さ0.3~0.4mを測る。溝東肩の大部分は、現代の擾乱によって削平されている。埋土は、上層から茶灰色粘土層、灰色砂質層、灰色砂層が堆積し、古墳時代前期から同後期の土師器・須恵器片が出土した。

溝一4は、北東から南西へ連なり、溝一3の東肩で消える小規模な溝で、溝幅約0.35m、深さ約0.15mの断面U字形溝である。埋土は茶灰色粘質土層で、古墳時代前期の土師器片が出土した。

土壤

土壤一2は、溝一2によって、南東肩が切られた楕円形のすりばち形土壤である。長軸2.8m、短軸1m、底部は2段になっており深さ0.22mと0.33mを測る。埋土は、暗灰色砂質層と黄白色砂質層の互層がみられ、埋土内より甕、鉢と壺が出土した。(図版一8、挿図一第7図)

土壤一3は、周囲を柱穴跡によって切られた円形の土壤である。径1.0m、深さ0.85mを測る。埋土は、上層から茶褐色砂質層、暗灰色粘質土層、黒灰色粘質土層が堆積し、中層から完形の甕(図版一35・86)が出上した。形態から、井戸状遺構とも考えられる。

土壤一6は、西肩を溝一1に切られた円形すりばち形土壤である。径2.2m、深さ0.6mを測り、埋土は茶灰色粘質土層、茶灰色粘質土層と茶褐色粘土層の互層であった。出土遺物は、上層より古墳時代前期の土師器片が僅かに出土したのみである。

土壤一11は、径0.8m、深さ0.91mの円形土壤である。埋土は、茶褐色粘質土層と灰色粘土層の互層がみられた。出土遺物は、古墳時代前期から同後期の土師器・須恵器片であつた。

井戸

井戸一は、径2.2m、深さ4.42mを測る円形素掘りの井戸である。埋土は灰色粘質土層が堆積しており、須恵器、陶器片などが検出された。しかし、その規模、埋没状態から近代の井戸と思われ、また洪積砂礫層まで掘り込まれているが、水は涌かなかつたため廃絶したとも考えられる。

出土の東奈良編年IVである。

高環形土器（図版一18・35 92～94） いずれも脚部のみである。93は、中空で裾広がありの柱部に大きく広がる裾部、裾端部は丸く終る。裾部に円孔があけられている。溝一4出土の東奈良編年IVである。

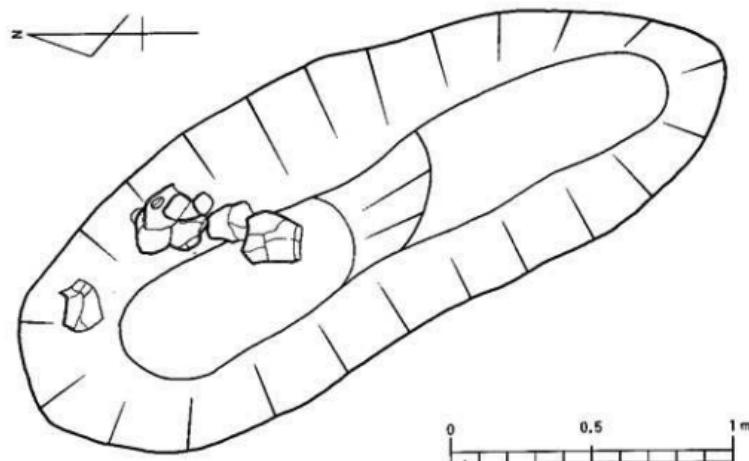
鉢形土器（図版一17・18・35 89～91） 90は、丸底の底部から内弯ぎみにのび、頭部でややくびれる。体部外面はヘラ磨き調整、口縁部内面は刷毛目調整がなされている。口径16.7cm、器高7.3cm、井戸一2出土の東奈良編年IVである。

石器

石器（図版一18・35 95） 当調査地区より出土した唯一の石器である。平面は菱形をなし3方向に磨かれており、断面は三角形、側面はそりがある。小さな孔が穿かれていることから、装身具あるいは漁具と考えられる。長さ4.6cm、幅2.35cm、厚さ0.5cm、重さ6.6gを測る頁岩で、溝一3出土である。

5. 結語

当調査地区より検出された遺構の多くは、中条小学校付近の弥生時代から古代、中世の遺構が存在するに比べて、古墳時代前期から同後期と限られた時期のものであった。柱穴跡から建物の復元はできかったが、井戸が検出されていることから、この付近に古墳時代前期頃の集落が存在していたと思われ、中条小学校遺跡の広がりが確認された。



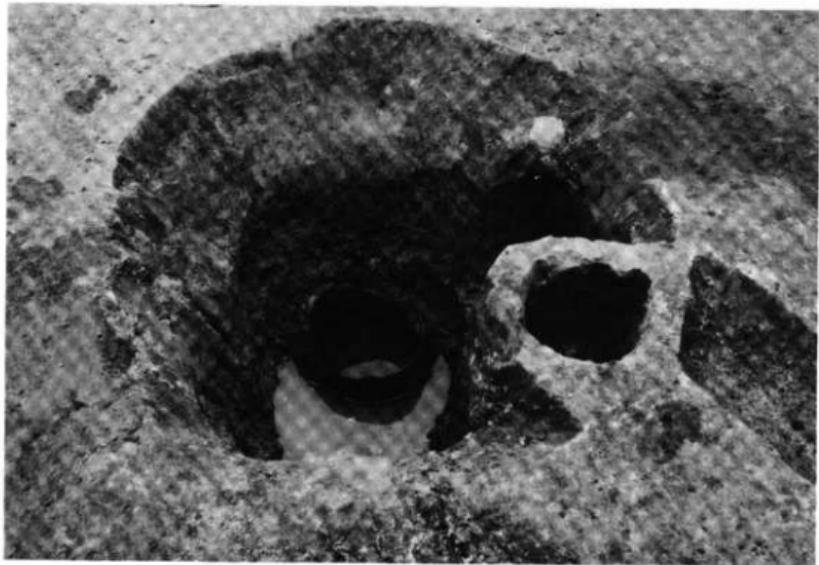
挿図一7 土壌一2 土器出土状況図

図 版





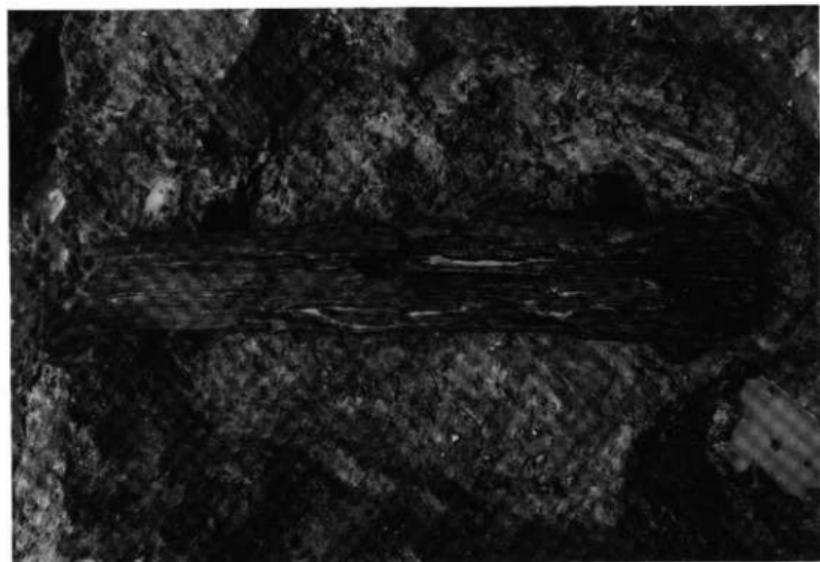
東奈良遺跡86-1 H・N, K-4-H地区全景（西から）



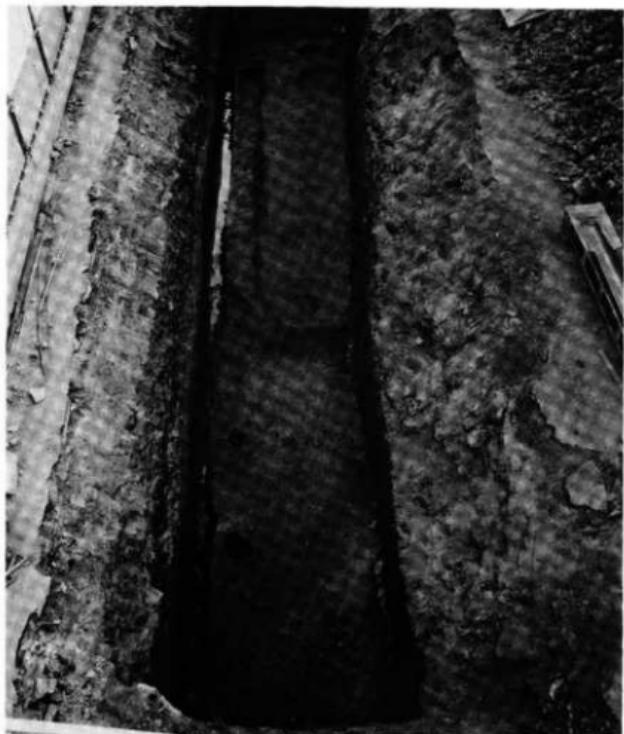
東奈良遺跡86-1 H・N, K-4-H地区 井戸-1



東奈良遺跡86-2 H-N, H-4-B地区全景（北から）



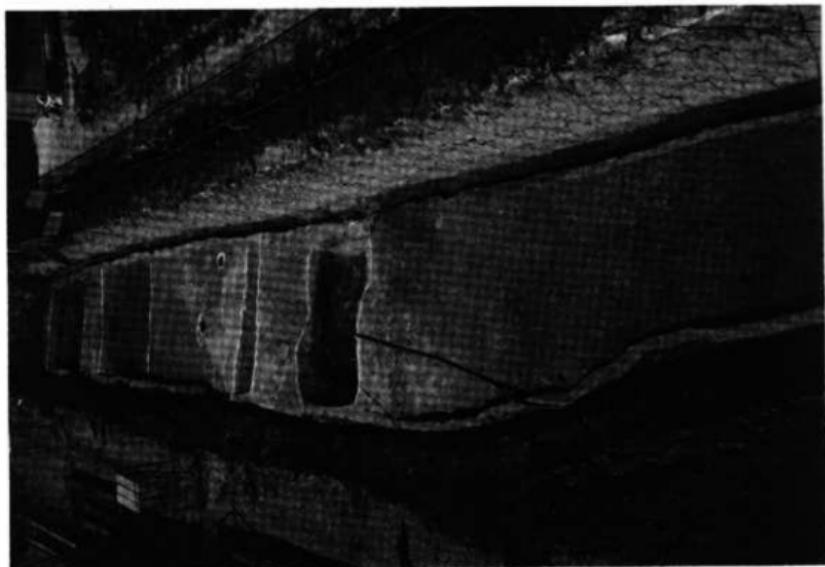
東奈良遺跡86-2 H-N, H-4-B地区 桶



東奈良遺跡86-3 H・N, J-2-D地区全景（北から）



東奈良遺跡86-4 H・N, I-2-D地区調査風景（南西から）



東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区南第Ⅱ遺構面（南から）



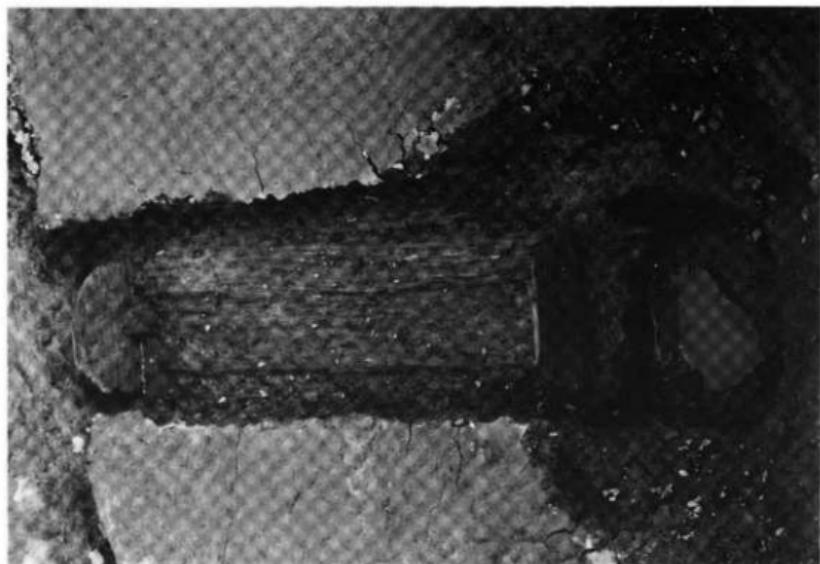
東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区南第Ⅰ遺構面（南から）



東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I 地区北第II遺構面（北から）



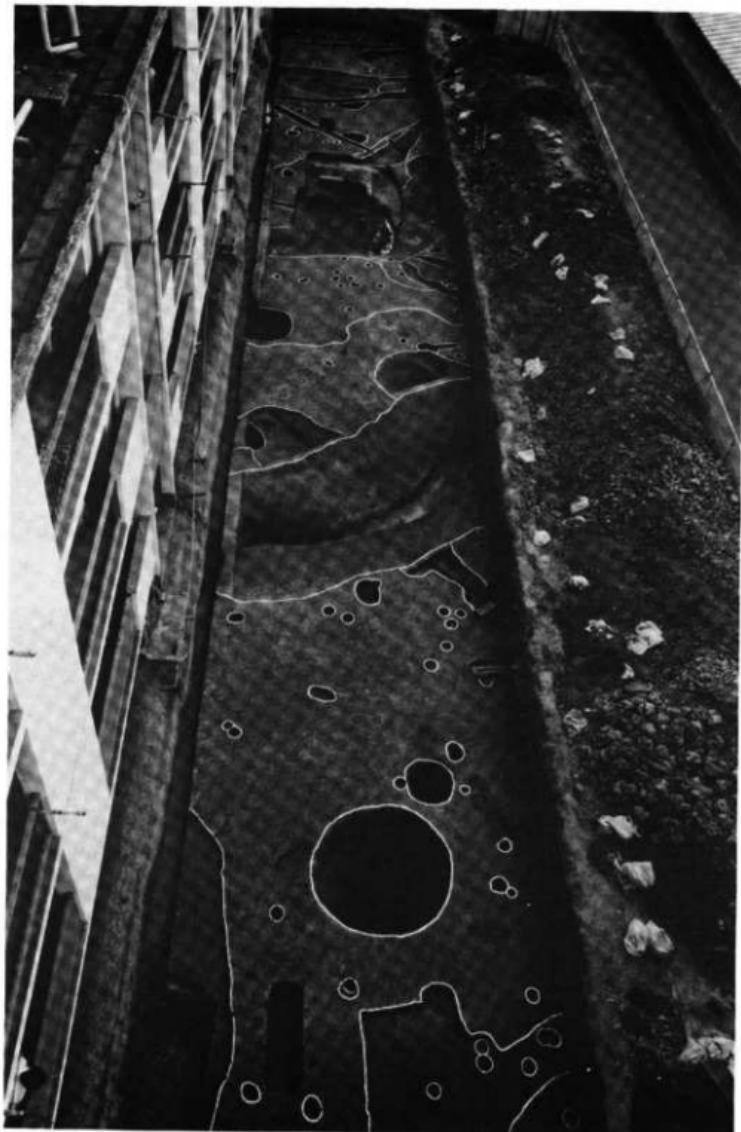
東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I 地区 土器-II



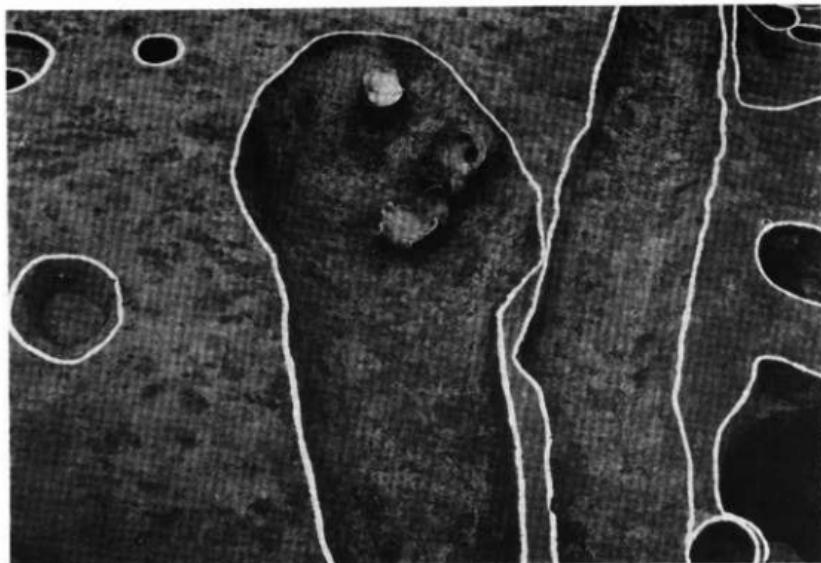
東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区 木棺-I



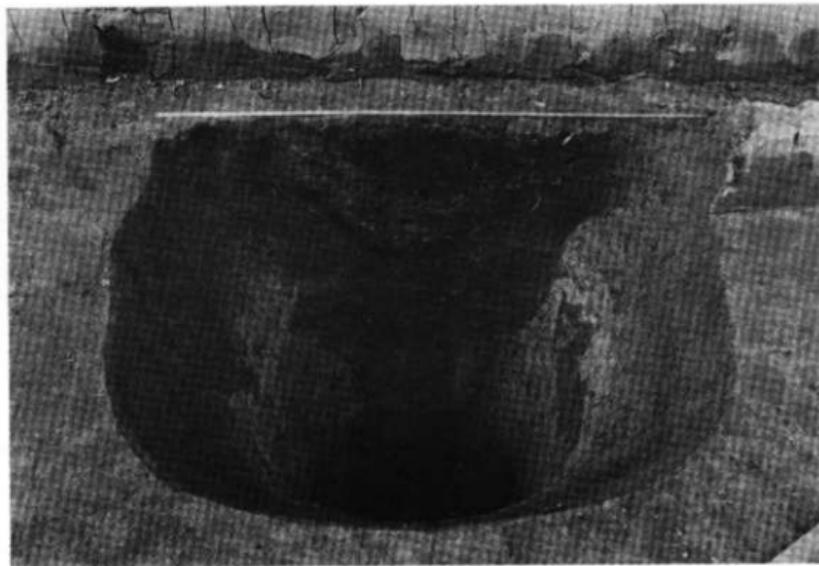
東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区 木棺-II



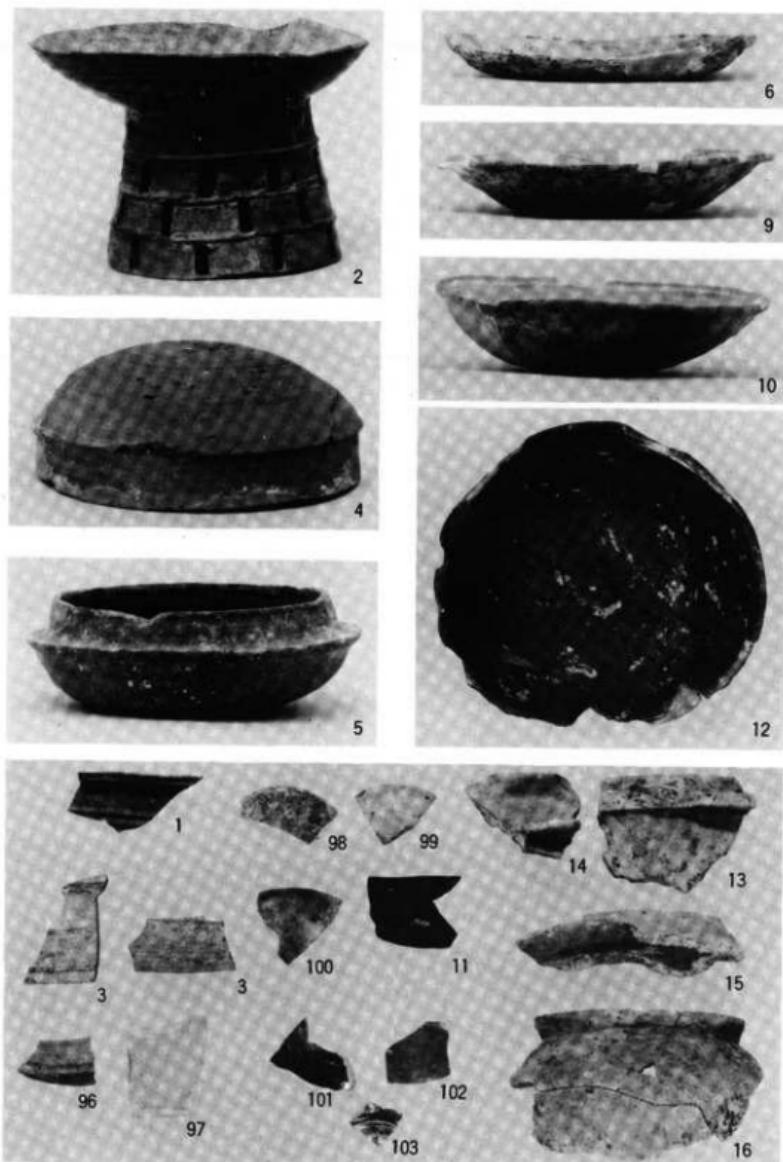
中条小学校遺跡86-2 全景（西から）



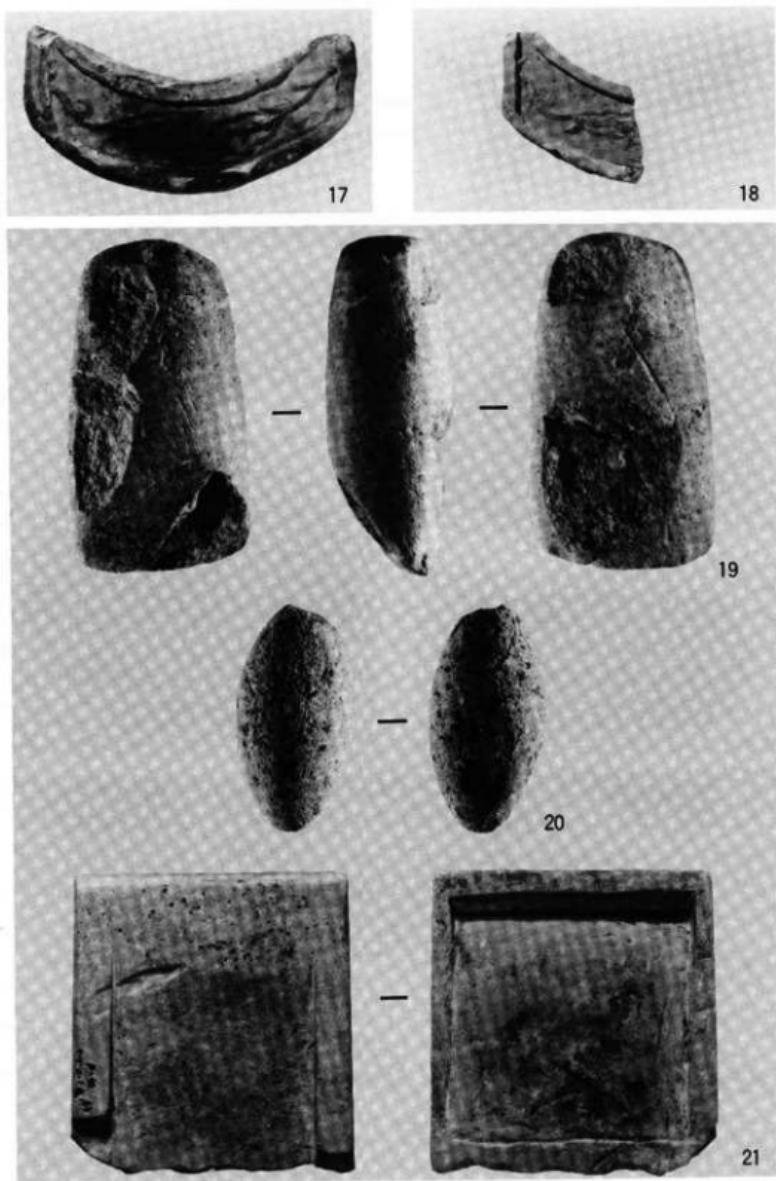
中条小学校遺跡86-2 土壌-2



中条小学校遺跡86-2 井戸-2



東奈良遺跡86-1 H・N, K-4-G・H地区出土の土器



東奈良遺跡86-1 H・N, K-4-G・H地区 出土の瓦, 石器



28



23



30



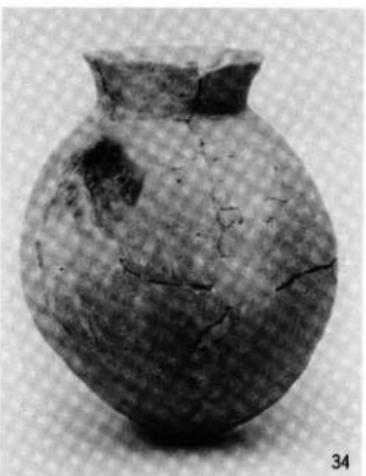
36



35



33



34

東奈良遺跡86-2 H・N, H-4-B地区出土の土器



38



37



39



41

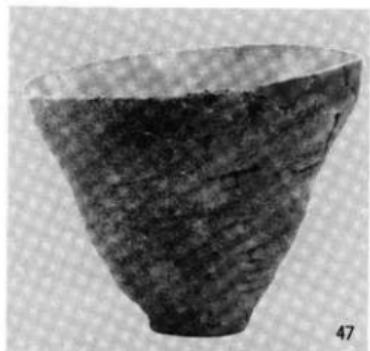


45



46

東奈良遺跡86-2 H・N, H-4-B地区出土の土器



47



49



54



52



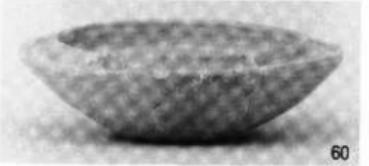
58



57



59



60



62

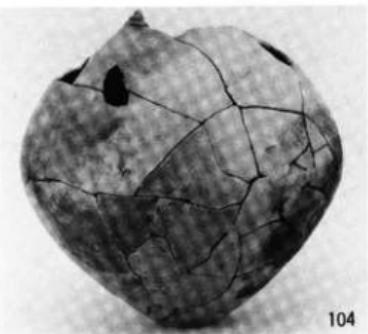


61



63

東奈良遺跡86-2 H・N, H-4-B地区出土の土器・石器
東奈良遺跡86-3 H・N, J-2-D地区出土の土器



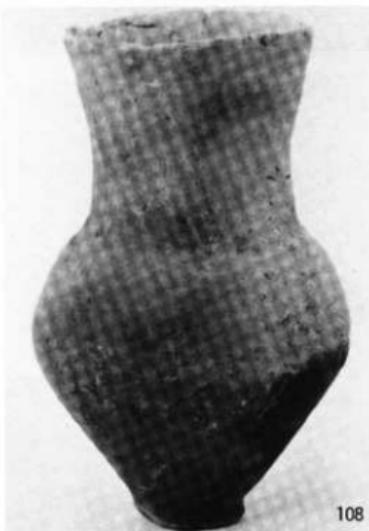
104



107



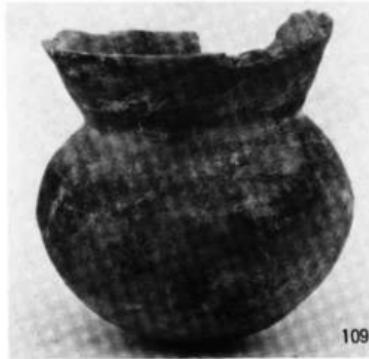
105



108

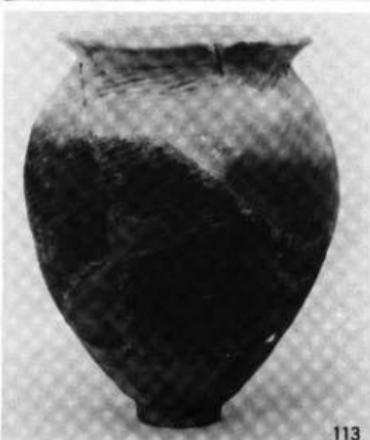
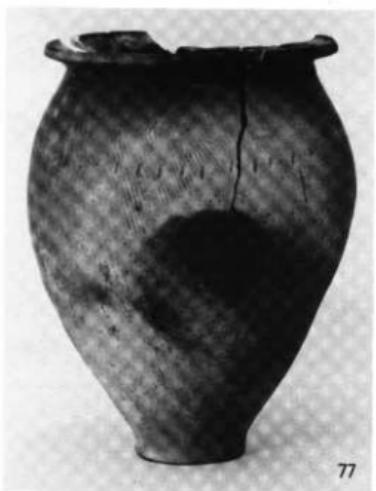
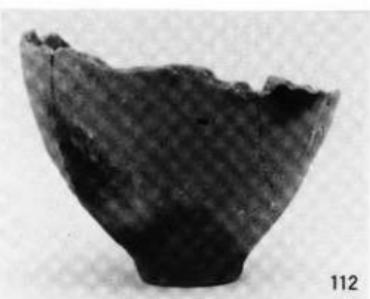


106

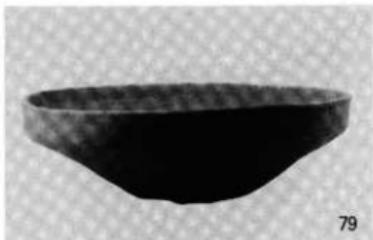


109

東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I 地区出土の土器



東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区出土の土器



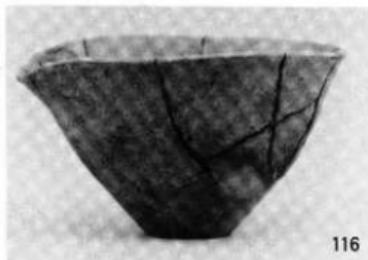
79



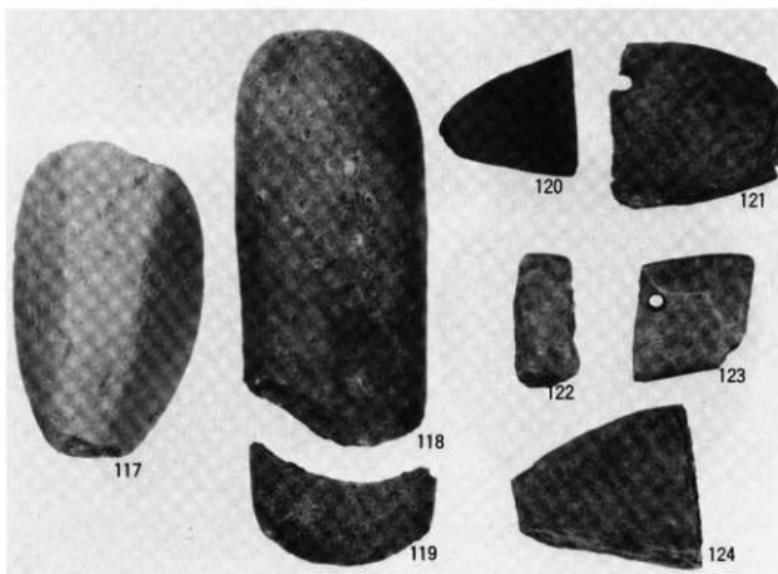
115



114



116



117

118

119

120

121

122

123

124

東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区出土の土器・石器



83



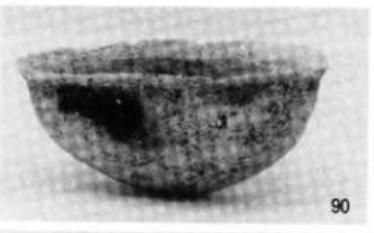
85



84



88



90



86



87

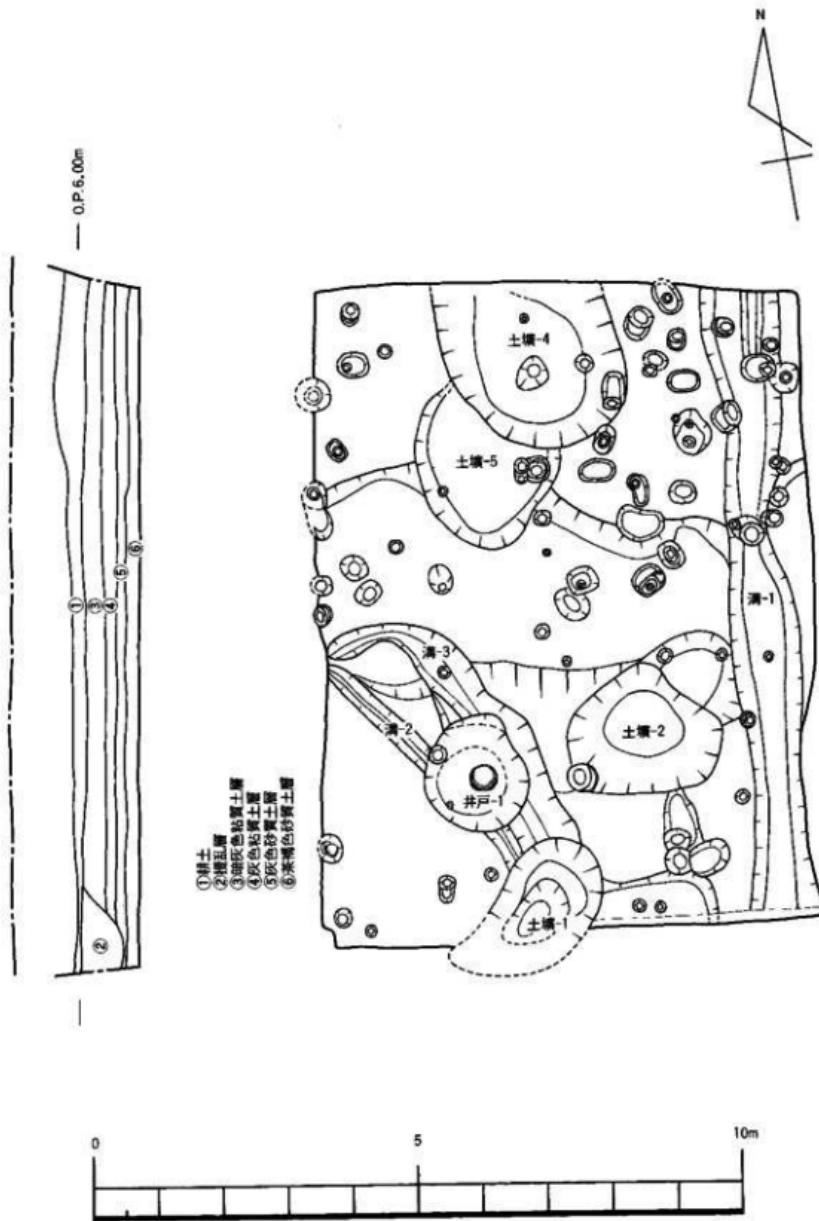
中条小学校遺跡86-2 出土の土器



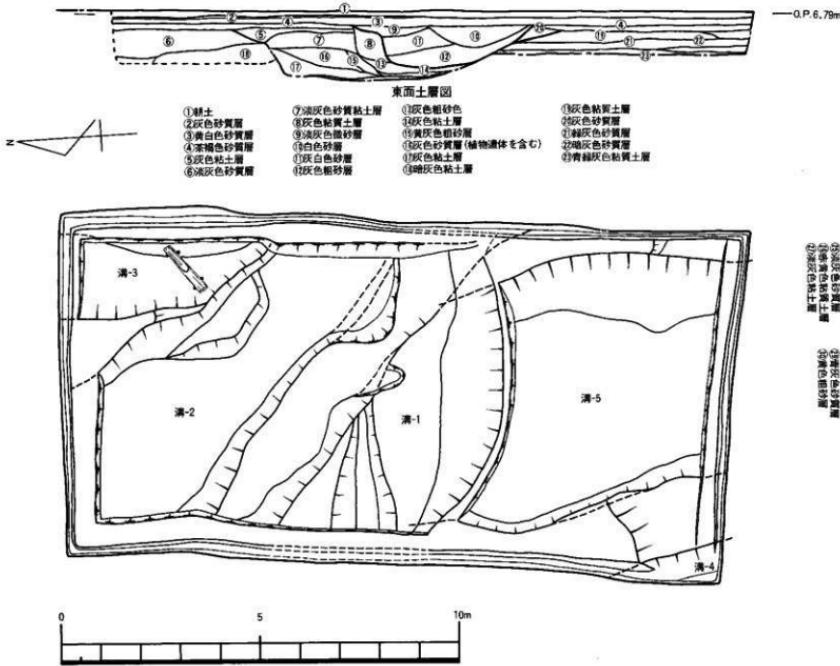
中条小学校遺跡86-2 出土の土器・石器



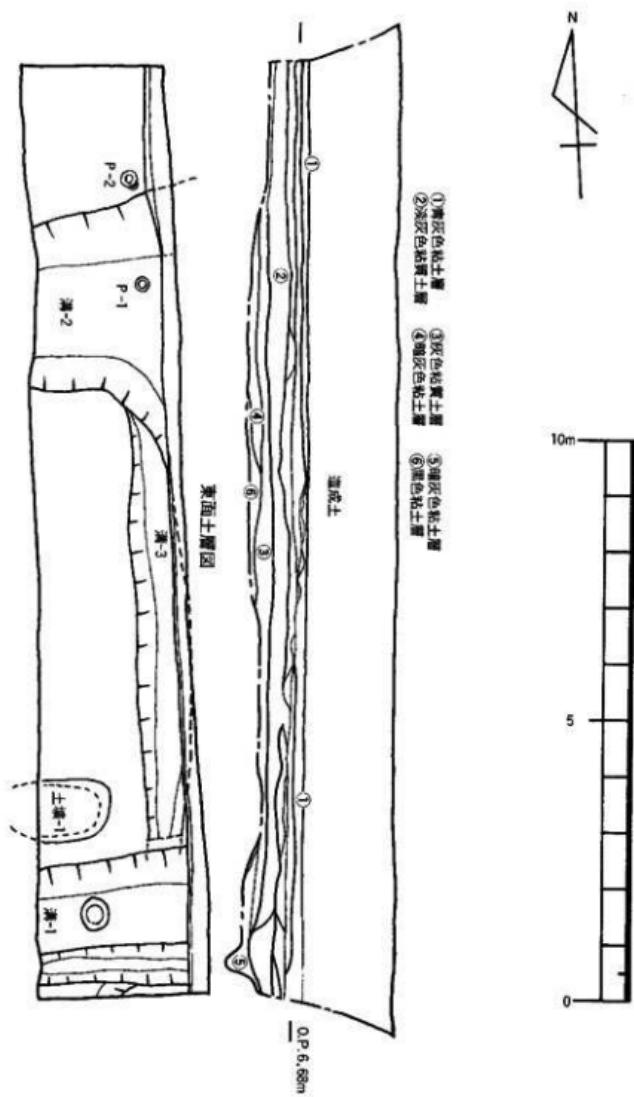
東奈良遺跡・中条小学校遺跡全体図



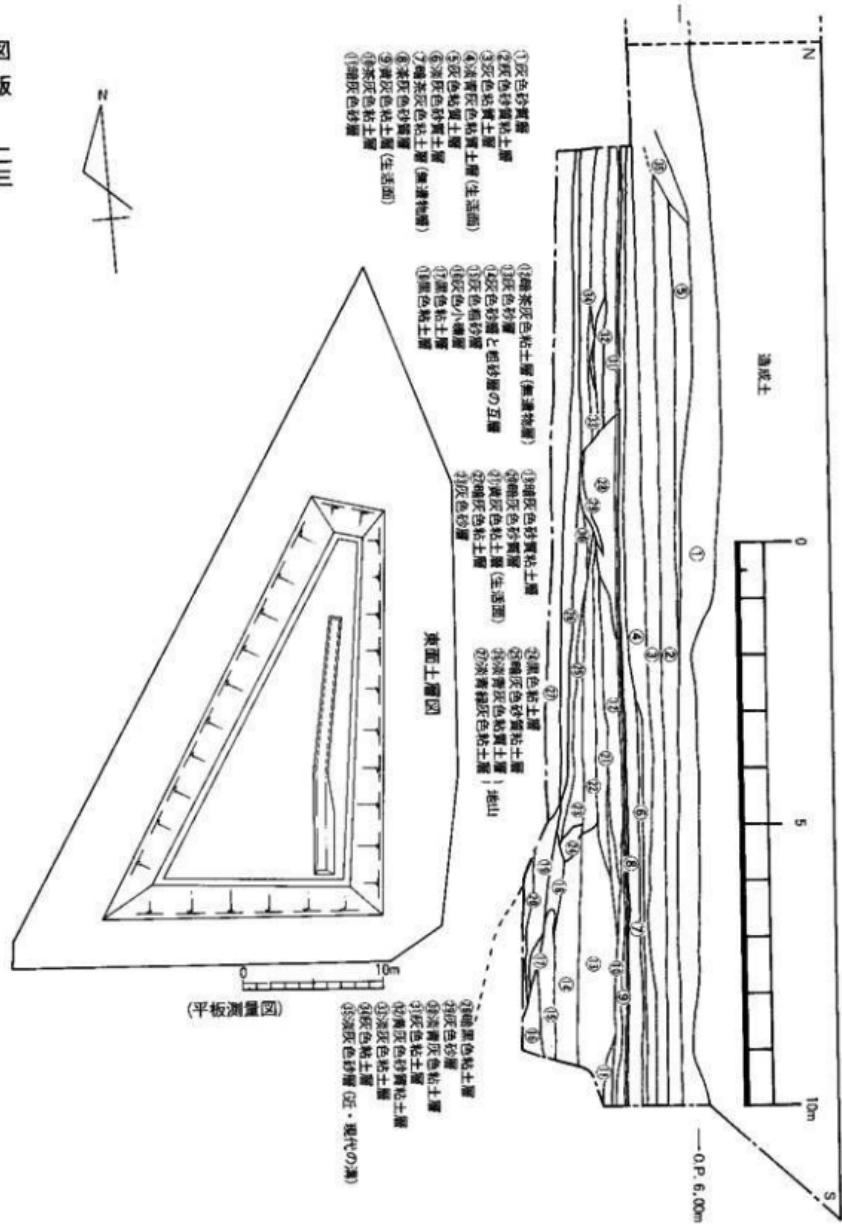
東奈良遺跡86-1 H-N, K-4-H地区全体図・土層図



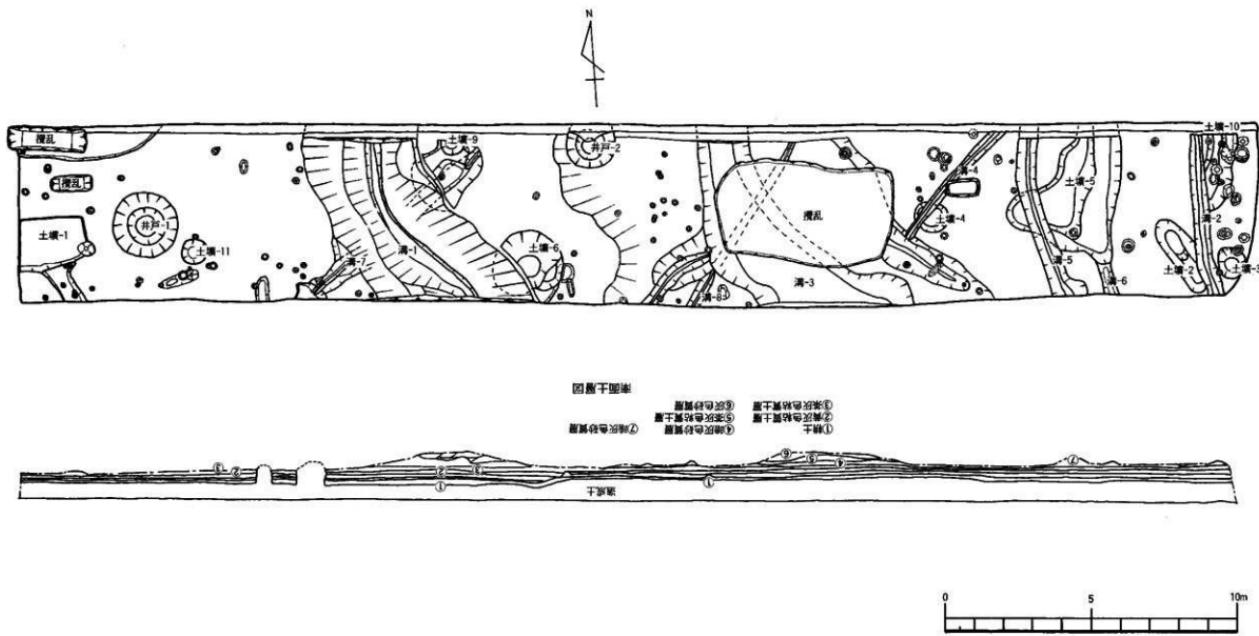
東奈良道路86-2 H・N H-4-B地区全体図・土層図



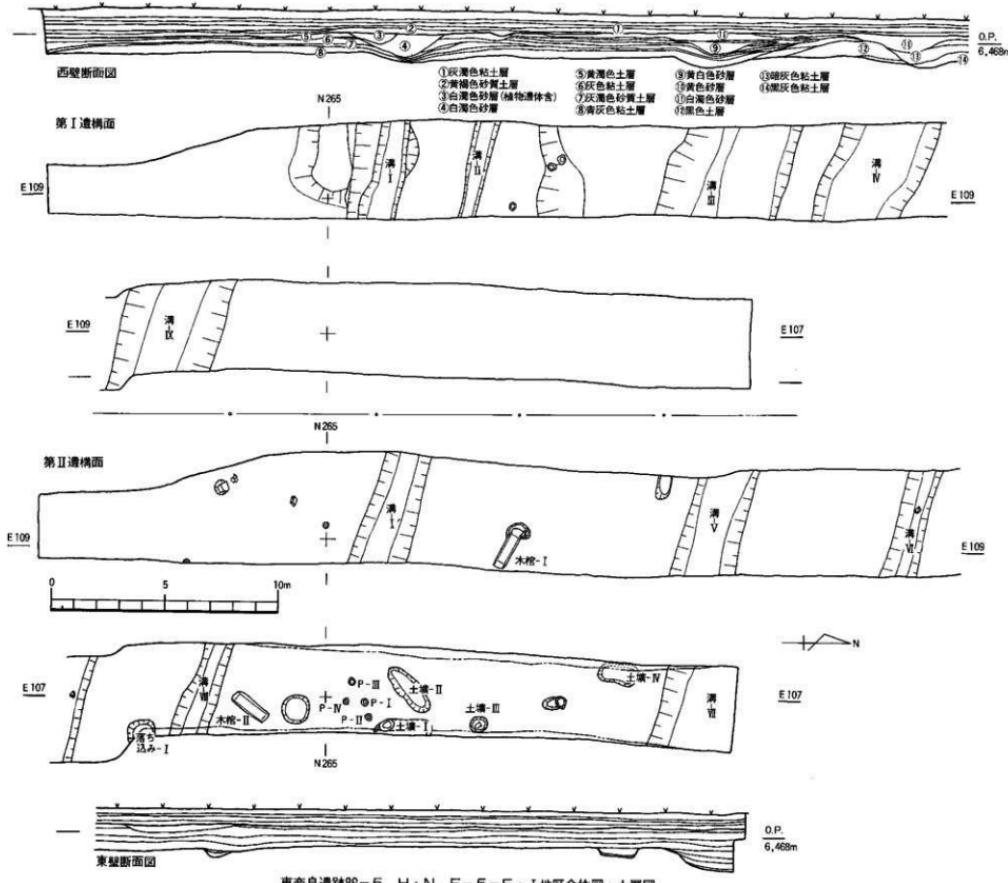
東奈良遺跡86-3 H・N, J-2-D地区全体図・土層図

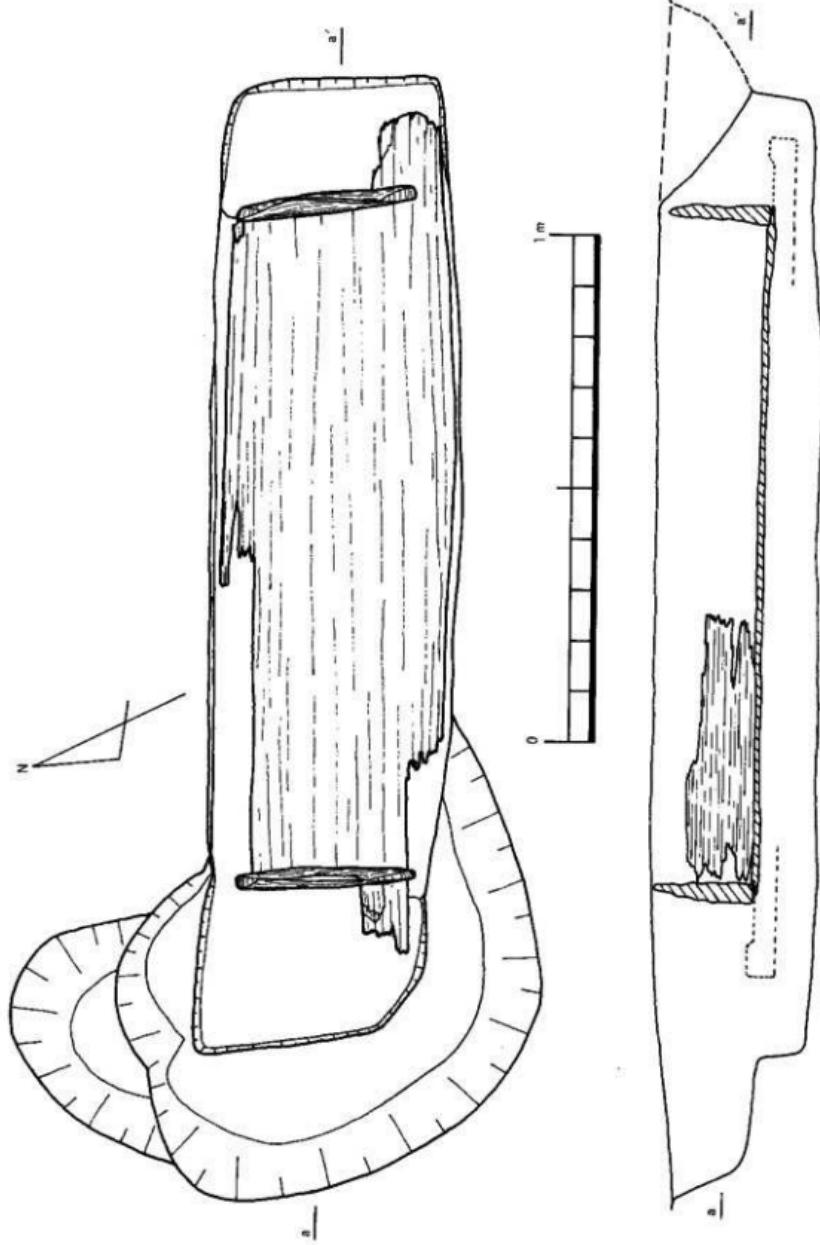


東奈良遺跡86-4 H・N, I-2-D地区全体図・土層図

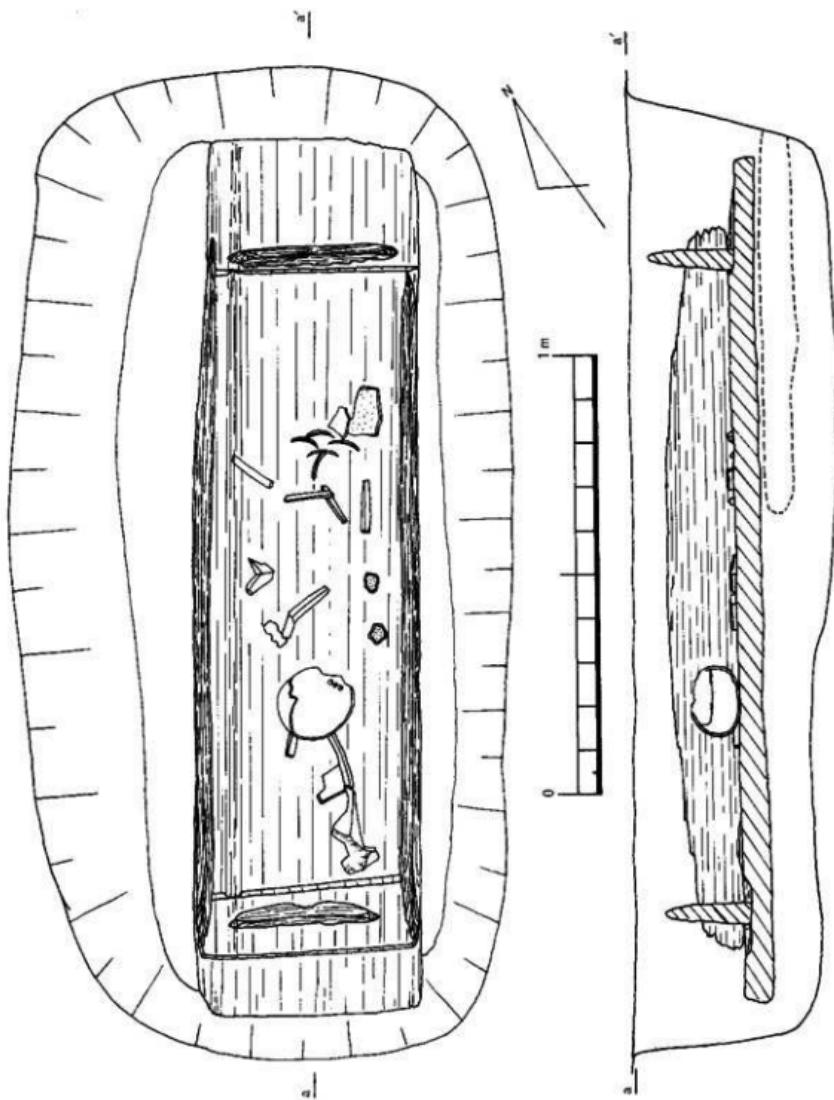


中条小学校遺跡96-2 全体図・土層図

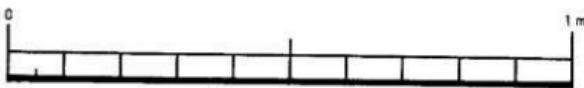
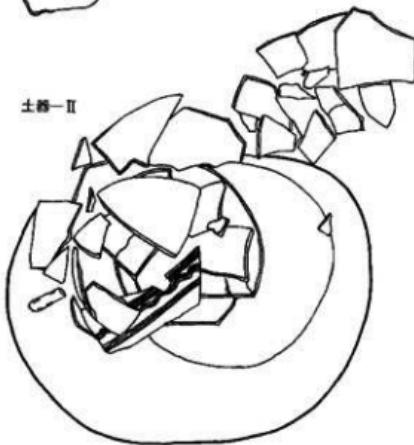
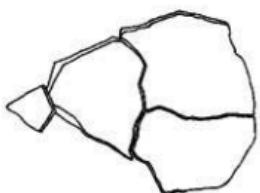
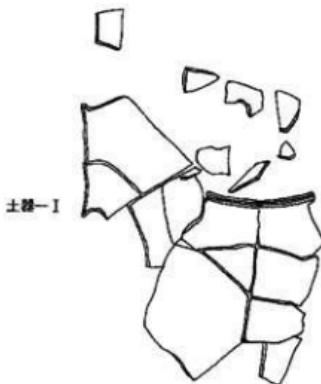




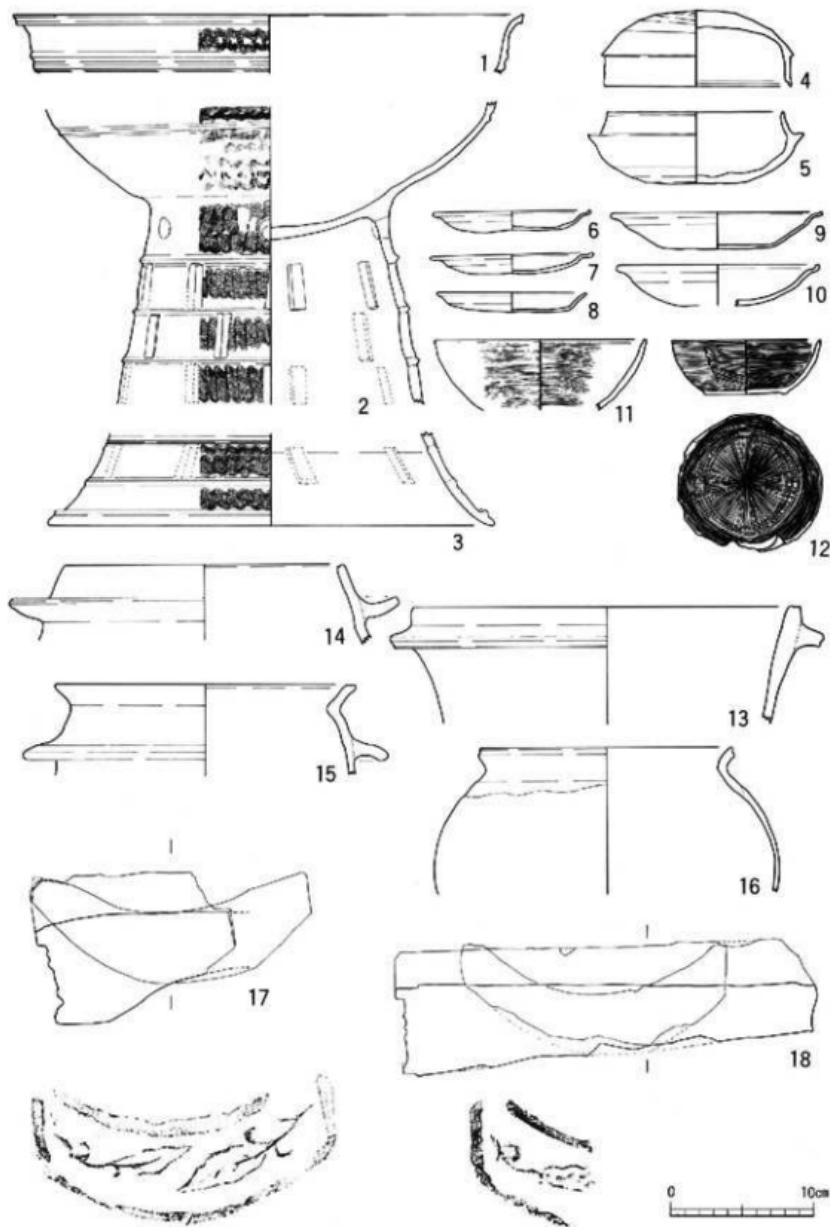
東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I 地区木棺-I



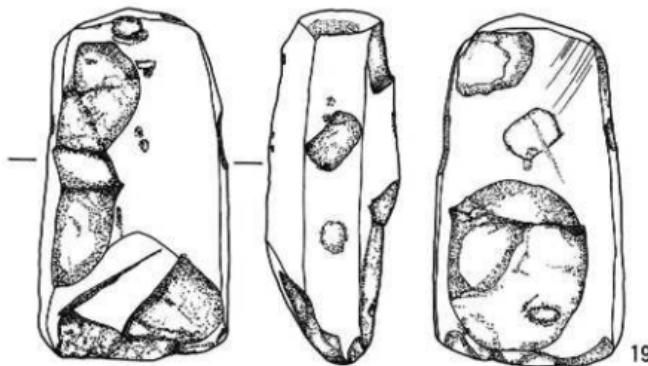
東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区木棺-II



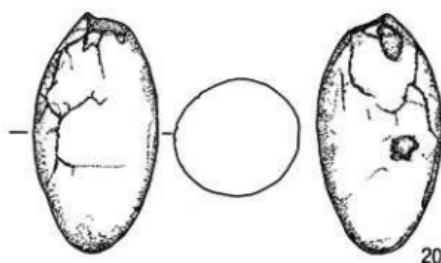
東奈良遺跡86-5H・N, F-5-E・I地区土器-I・II



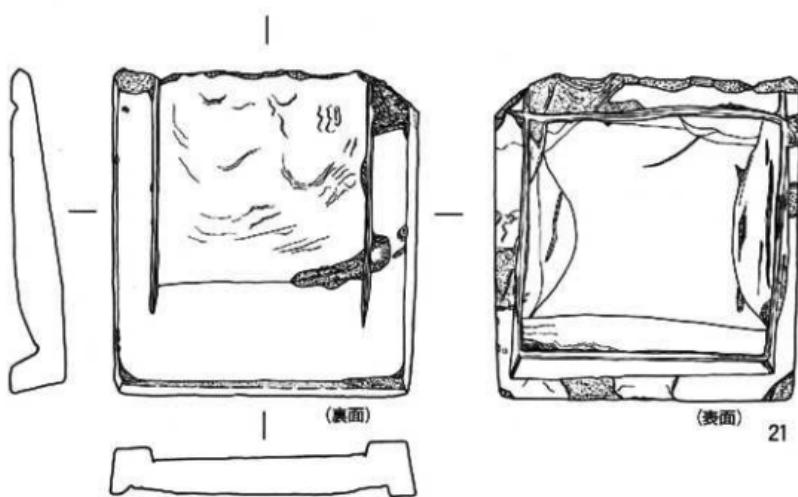
東奈良遺跡86-1 H・N, K-4-G・K地区出土の土器・瓦



19



20



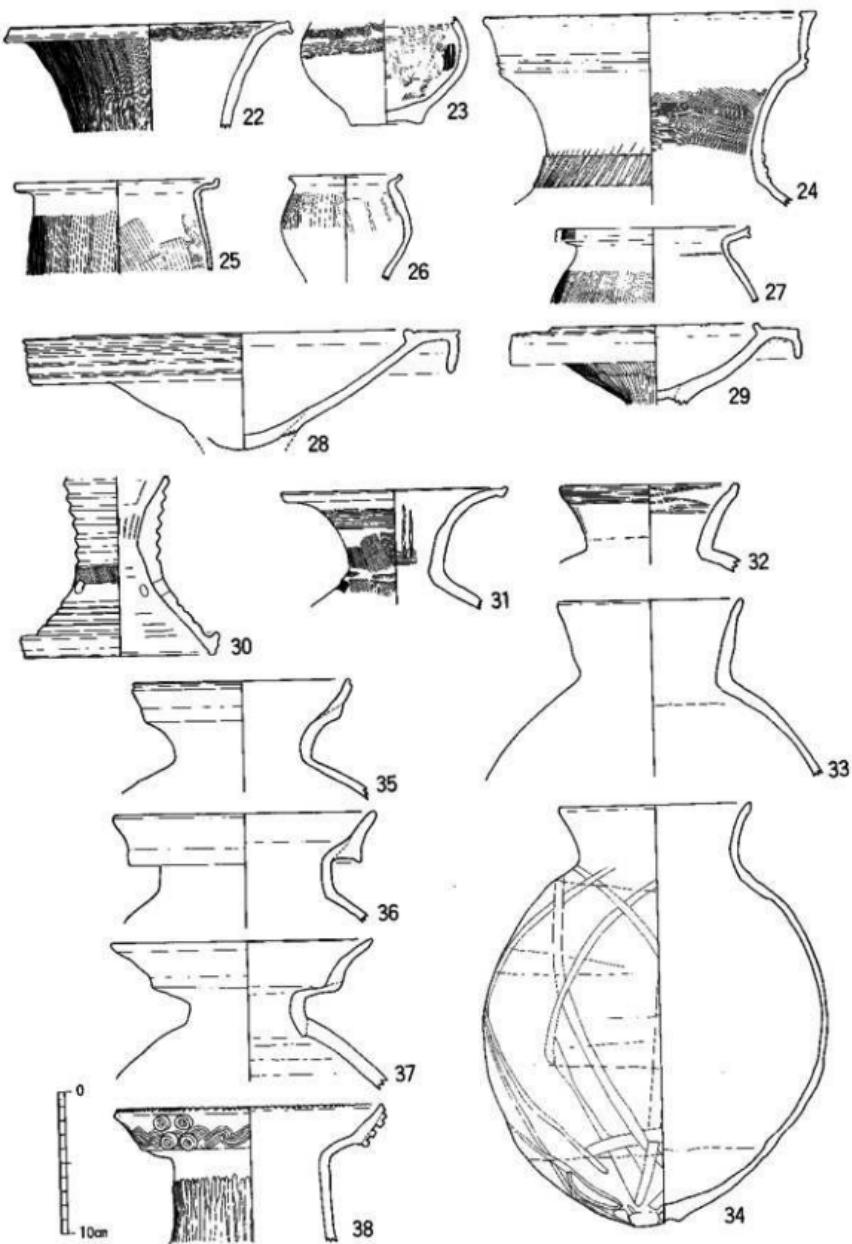
(裏面)

21

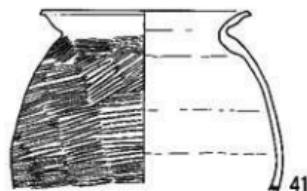
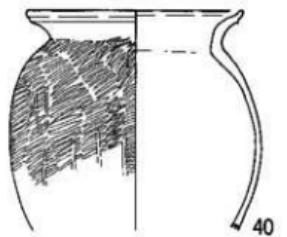
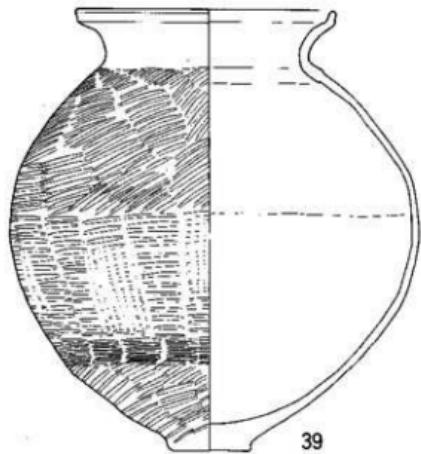
東奈良遺跡86-1 H・N, K-4-G・K地区出土の石器

図版

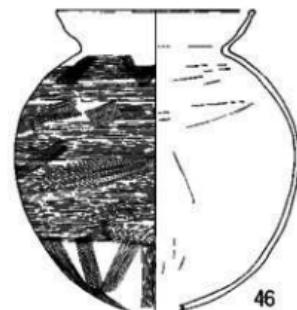
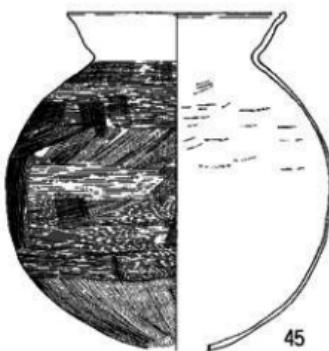
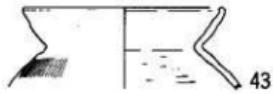
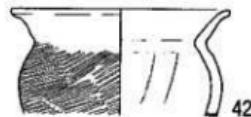
三



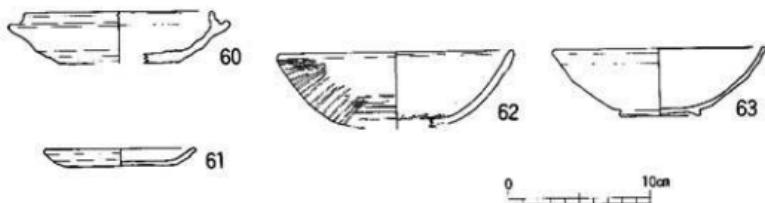
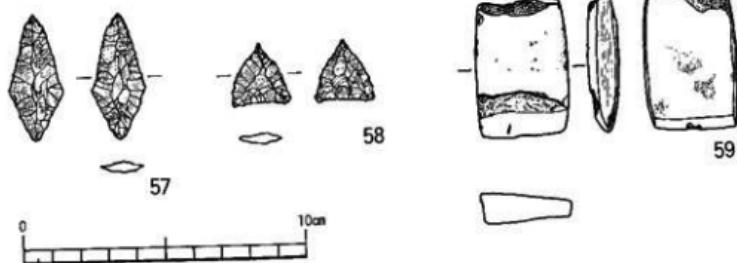
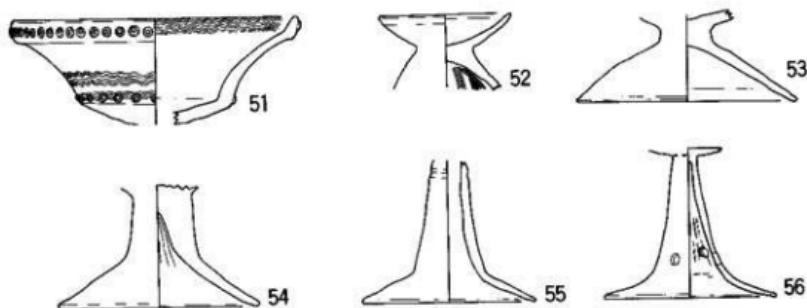
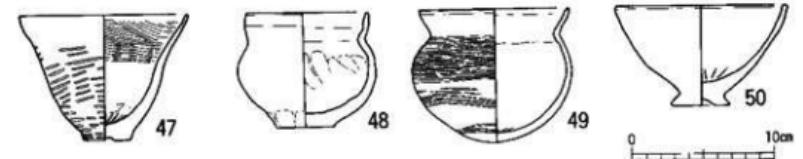
東奈良遺跡88-2 H・N, H-4-B地区出土の土器



0 10cm

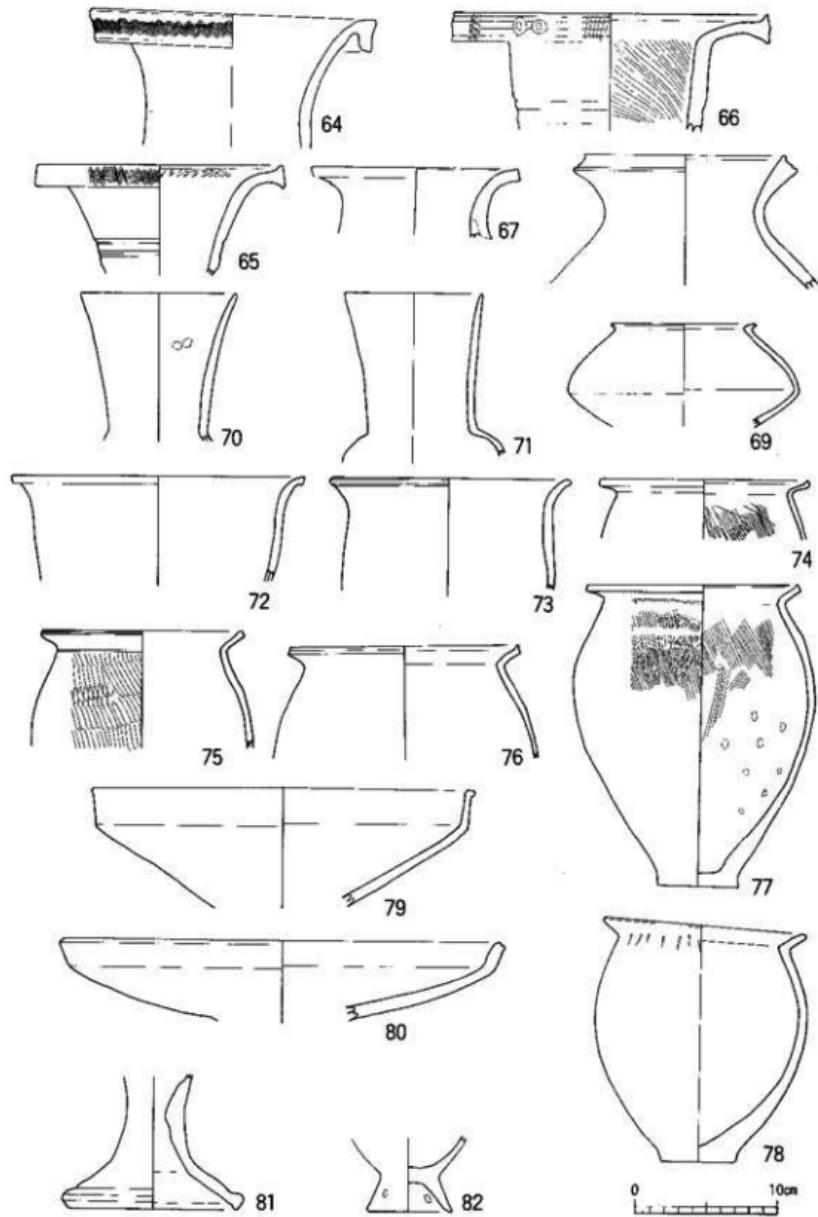


東奈良遺跡86-2 H・N, H-4-B地区出土の土器・石器

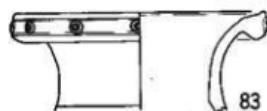


東奈良遺跡86-2 H・N, H-4-B地区出土の土器・石器

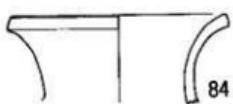
東奈良遺跡86-3 H・N, J-2-D地区出土の土器



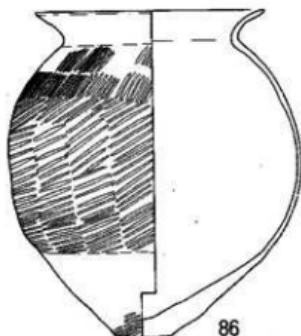
東奈良遺跡86-5 H・N, F-5-E・I地区出土の土器



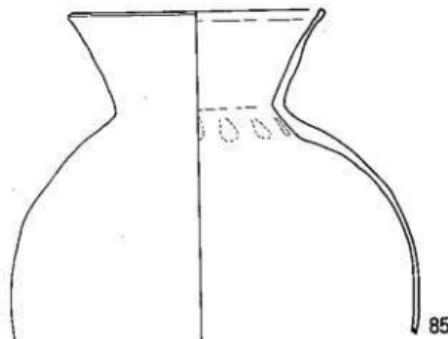
83



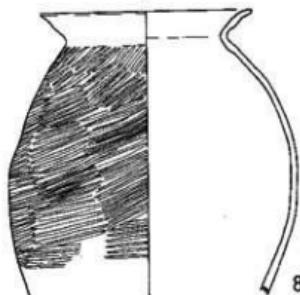
84



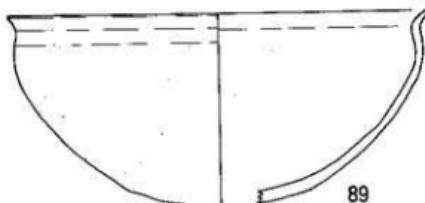
86



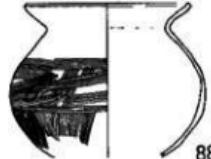
85



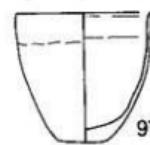
87



89



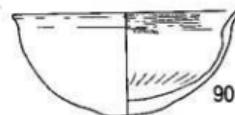
88



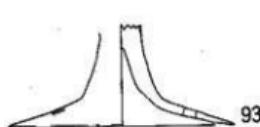
91



92



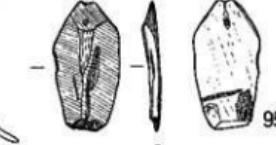
90



93



10cm



5 cm

中条小学校遺跡86-2 出土の土器・石器

昭和61年度 発掘調査概報 I

発行日 昭和62年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷 茅茨木教材社